

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

★MOH通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M **循環**
→もったいない
他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O **共生**
→おかげさま
人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H **抑制**
→ほどほどに
欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

M・O・H
通信 14号
2006
Autumn



「M・O・H」のマーク = 牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします

【共生】

〈特集①—私たちは、正しく理解しているだろうか?〉

日高 敏隆 氏 対談

「地球環境問題と共存する現代」

〈特集②—未来と共存する企業〉

リコー沼津事業所「環境保全」への取り組み

〈特集③—愛知県長久手町「ゴジカラ村」訪問記〉

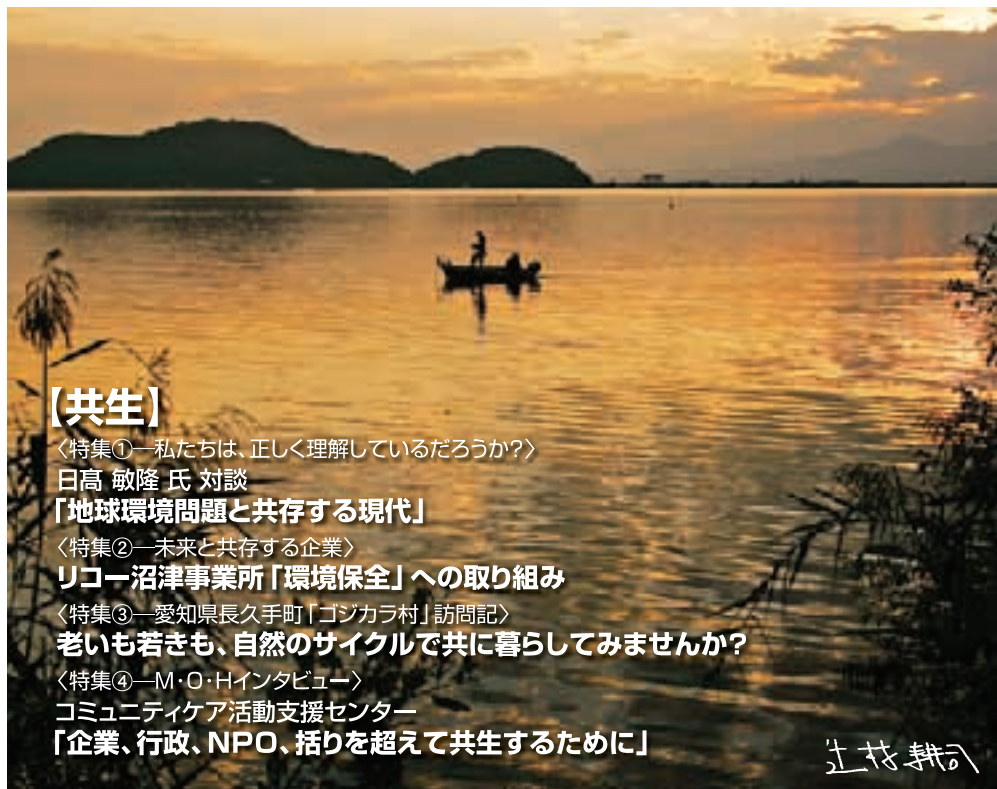
老いも若きも、自然のサイクルで共に暮らしてみませんか?

〈特集④—M・O・Hインタビュー〉

コミュニティケア活動支援センター

「企業、行政、NPO、括りを超えて共生するために」

辻花 執筆



長命寺港より見る水茎の岡 遠く比叡山に陽が落ちる

M・O・Hニュース



滋賀“もったいない”知事の初仕事
週刊ダイヤモンド 2006/9/23 124ページ

——高い倫理性と社会貢献の精神 日本版 CSRの源流「近江商人」——

下段を抜粋— たえば包装資材メーカーの新江州(長浜市)だ。同社は、「MOHの会」を発足させ、「M=もったいない」「O=おかげさまで」「H=ほどほどに」という循環型社会を考える情報誌を発行。社の使命を「循環型社会形成への貢献」とし、研究所を設けて新たな事業展開に取り組んでいる。こんな近江商人の土地だからこそ、「もったいない」知事は生まれたのである。

くつき 秋の夜長を楽しむタベ 紹介
びわ湖放送 滋賀経済NOW77回
2006/9/23

「最も幸せな国」バヌアツ。
フジサンケイビジネスアイ 2006/7/14
12面

先進国は軒並み下位。イギリス・シンクタンク調べ。

—略— 調査担当者は「(結果は)相応の生活環境の中で、どのようにして長く幸福な人生を送れるかという見本を示している」と指摘した。

転形期への視座(4)環境

加藤 尚武氏に 聞く
京都新聞 2006/7/6 14ページ

限界迎えた人類の進歩～「成長」乗り越える倫理模索

「最近まで、現代人のすることが未来世代への贈り物になるという素朴な信念が、広く信じられた。しかし、今見えてきたのは、現代の繁栄が未来世代への貧困へとつながる、逆立した関係だ」—略— 人をとらえて離さない進歩への夢。それが地球の破壊へつながることに気づいた時、それを防ぐ人間の倫理はどう紡ぎ出すことができるのか。

ベターホーム協会が「大切な食べ物を無駄にしない読本」を出版。上手な保存のコツを紹介。まず、買いすぎに注意。
中日新聞 2006/6/20 20ページ

生涯学習の場としてご利用ください
しが生涯学習アカデミー・学びのメニューブック

発行は滋賀県教育委員会。内容は学びたい講座が多彩に選べる、講座が一目で分かるメニューブックだ。企業主催講座(170ページ)に「持続可能社会のキーワード“もったいない・おかげさま・ほどほどに”から学ぶ」、環境商材のショールーム“eプラザ”見学など3講座が紹介されている。

目次——「共生」

M・O・H対談

地球環境問題と共存する現代 日高敏隆&森建司……………3

M・O・Hレポート1

リコー沼津事業所「環境保全」への取り組み ……11

M・O・Hレポート2

世代を越えて共生する、愛知県長久手町「ゴジカラ村」訪問記 ……17

シヨート・シヨート

ふれあい 第三回「もったいないお化け」 中井一三雄……………24

M・O・Hインタビュー…「コミュニティケア活動支援センター」

企業、行政、NPO、括りを超えて共生するために 佐藤修……………25

M・O・Hレポート3

(自転車十旅十環境問題)×全国の仲間〓ちやりきやう! ……31

”くつき 秋の夜長を楽しむタベ“大成功! ……35

野菜泥棒はだれだ(漫画) オノミユキ……………41

藤樹先生に学ぶその3 井上昌幸……………45

MOHECOTOURISM4

400万年の湖から 檀上俊雄……………49

アウグスブルクから

ヘドイツだより4 原修子……………53

連鎖 今関信子……………55

講演日記 ……57

きのご狩り 三山元暎……………59

本の紹介 ……60

三世代の共感が共生の「コツ」 つじむらこことみ……………61

読者の声 ……62

私は こもも。三まの女の子。
生まれ76年。大家族からもらわれてきた、宗猫。
大好物はするめと鯉節。「みやー」って催促すると、
山盛りくれる。
のどが渴くと、庭のバケツに水がある。
草は畑にたんまりと。
ねずみや雛やバツタで遊ぶ。
もって帰ると、宗猫が大喜び。すぐに取り上げる。
私はきれいい好き。体はいつまきれいなめる。
「ころころ」というと、宗猫の顔はほころぶ。
言葉はなくて、思いは通じる。

ことみ



地球環境問題と共存する現代

私たちは、正しく理解しているだろうか？

地球環境問題は、私たち人間にとって見過ごすことのできない問題です。しかし、私たちの日常の中に、強い問題意識として根付かないのはなぜでしょう？

私たちは、情報や知識として地球環境問題を理解し、現実の存在として感じないまま、解決の糸口を科学に委ねようとしているのかもしれない。

地球環境問題を「自然を支配しようという人間の生き方の問題」と捉える、総合地球環境学研究所所長の日高敏隆さんにお話をうかがいました。

はじめに――

私たちは「イリュージョン（幻想、錯覚）」で世界を見ている

森 先生がお書きになった「動物と人間の世界認識―イリュージョンなしに世界は見えない」（筑摩書房）を読ませていただき、これは非常に興味深い話だと思いました。最初にぜひ、我々人間のイリュージョンについてお話いただければと思うのですが。

日高 では、本にも書いた昆虫の性フェロモンを例にあげて、少し遡ってお話しましょうか。

僕は東大の動物学科を出て、就職し

たのが農工大（東京農工大学）でしたから、そこでは昆虫学や動物学を専門にやるのではない。何をやるかと言うと、農家の皆さんが農作物を作るのに、害虫の被害が出る。その害虫となる虫について研究するんです。大学での研究とは異なりましたが、これこそ本当の学問だと思いましたね。

森 知識を実際に役立てるのだから、やり甲斐もあったでしょうね。

日高 それで、ネズミやダニ、害虫の研究をやっている者が集まる応用動物昆虫学会という学会があつて、僕も入会したのですが、そこでは「ぶっかけ試験」をやっていたんです。害虫は次か

ら次に新しい奴が出てきますから、その都度、製薬会社が農薬を試作して、その効き目を害虫にぶっかけて調べる。これだけの量でこれだけの害虫が死にましたと報告をし合うんですが、何だかこれは昆虫学じゃないなど。害虫にしてみれば、種が生き残っている仕組みに基づいて増えるわけですから、その仕組みを知れば、何か弱点がわかるかもしれないというので、僕は昆虫の生活の研究を始めたんです。

森 弱点さえわかれば、もう農薬をぶっかけなくてもいいと。

日高 そうです。生態学の人たちが、虫が増えた減ったと研究している横で、

■対談

日高 敏隆

総合地球環境学研究所所長

森 建司

循環型社会システム研究所 代表

■総合地球環境学研究所 所長室

■2006年8月11日



日高敏隆所長(左)、森建司代表(右)

こちらは動物行動学です。虫がどうい
う風に生きているのかを探ろうと。そ
のころ評判になっていたのが性フェロ
モン。メスの虫が放出して、オスを遠
くから呼び寄せる。これを利用して、害
虫のメスから性フェロモンを取り出し、
それを合成してトラップを仕掛ければ、
その害虫のオスだけを駆除できると。
ぶっかけ式の農薬だと、害虫を食べて
くれる蜘蛛などまで殺してしまいます
から。

森 あれは画期的なことでしたね。

日高 ええ。それで研究が世界にワツ
と広まったんですが、そのうちに、思っ
たほど害虫の被害が減らないことがわ
かったんです。なぜだろうと。その頃
には、他の研究者たちが、誘引の仕組
みを知るために、メスの性フェロモン
は、距離に応じてどれぐらい薄くなる
かということも研究していて、僕には
わからない非常に細かで難しい計算を
行い、6〜7キロ先では、空気1ミリ
リットル中に、1分子の性フェロモン
しかない。だから、オスの触角、つ
まり感覚器には、性フェロモンが1分
子だけ入ってくるはずだと言っんです。

確かに、オスにマークをつけて放すと、メスの風下からそのオスがやって来るんです。でも、わずかに1分子の性フェロモンに反応して、本当に誘引されてきたのか、何かどこか間違ってるんじゃないかと。それで、メスを網かごに入れ、外からはメスの姿が見えないようにして、大きな黒い布の真ん中あたりに、その網かごを置いてみたんです。黒い布は、オスの動きを見やすくするための背景です。さあオスが来るかなと待っていたところ、網かごをめがけては来ない。ただ、その辺りを方向性も何も無しに、めったやたらに飛んでいるだけなんです。そして網かごからせいぜい1メートルというごく狭い範囲内を、たまたま通過したオスだけがメスのもとへ辿り着くことができる。それ以外は、メスに辿り着くことがない。段々と調べるうちに、結局オスは、メスのフェロモンの存在を空気にごく薄くでも感じると、興奮して飛び回り続けることがわかった。フェロモンはオスを飛ばせるんです。そういう意味で、1ミリリットル中の1分子に反応すると。しかしそれが、研究者の目に

は、数キロ先から誘引されて飛んできたと思ってしまう。勝手な思い入れなんです。当の虫の仕組みはそうじゃない。だから、性フェロモンのトラップを仕掛けても、あまり意味がなかったんです。

森 僕は、それ

を読んで、科学の力だけで解明しようとしても、限界があるということを知り、語っているように思いました。

日高 メスが匂いを出して、オスを遠くから呼び寄せるといふのは、人間のイリユージョン（錯覚、幻想、思い込み）なんです。僕にとつて、この発見は非常に大きなものでした。それ以来、色々な物を、そういう目で見るようになりました。しかし、人間がイリユージョンを持つことは、困ったことかと言っていると、そうではないんです。人間は

蝶は子孫繁殖のために必死で飛んでいるんです



イリユージョンなしに物は見えない。無念無想だとか、あるがままに見ると言いますが、それでは物は見えないだろうと思うんです。まずイリユージョンで物を見て、それからもう少し考えて、必ずしもそうじゃないということが見えてくる。それで現実の理解に近づくことができるんだと思います。

森 そうですね。何か興味がないと、まず見ようとしません。

日高 何かの関心を持って見ないといけないんですよ。

地球環境問題は、 自然を支配しようという 人間の生き方の問題

森 そのイリユージョンが、我々人間が地球環境問題をどう考えるかということにも、作用しているんじゃないかと思うんです。それで、先生の目には、地球環境問題がどのように見えているのかをお聞きしたくて伺いました。

まず、この総合地球環境学研究所(以下地球研)には、「総合」とついていませんね。研究内容に経済や産業、人間の

ライフスタイル等の要素を盛り込んで行こうとお考えですか。

日高 そうです。そもそも地球環境問題を研究する国立の機関としては、既に環境省の国立環境研究所がある。同じような研究所をつくって二重の投資になるのはマズイですから、それとの違いをはっきりせよとのことでした。どう違うかと言うと、地球上にはライオンとかカバとか人間と比べれば遙かに凄まじい動物がいるけれども、地球環境問題を引き起こしたのは人間だけです。人間は頭がいいから、たとえは

「総合」の意味は大きいですね

他の動物なら自然にあるものを食べ尽くしたら、よその場所へ移ろうとなりませんが、人間はそうはせずに、無くなれば作ろうと農業を始めた。林を切り拓いて畑をつくり、そこに稲を育て、自然をいじってきた。いじったことに対する自然の反作用が出てくれば、それを抑え、抑えたことに対してまた反作用が出てきたら、また抑える。要は、自然を支配しようとする人間の生き方が根っこにあって、それと反作用とのいたちごっこが、

まわりまわって起きるのが地球環境問題ではないか。人間の生き方というのは、広い意味で人間の文化ですから、地球環境問題を人間文化の問題として捉えることで、問題の解決にも近づけるだろうし、国立環境研との違いも出ると思っています。

森 人間文化の問題として研究するとなると、それは、新しい学問と言えますね。まわりまわってという過程には、色々な要素が絡まってくると思うのですが。

日高 世界4番目の湖、アラル海(カザフスタン共和国とウズベキスタン共和国にまたがる湖で、面積は琵琶湖の約100倍近くあったが、1960年以來、急激に縮小。現状のままでは約20年後に消滅するとされている)が消えかけているのをご存知でしょうか。これは旧ソ連の時代に起きた問題です。社会主義国家では、すべての物が自国で生産されなければならないというので、この高温な中央アジア半砂漠地帯で、綿を栽培するために、アラル海に注ぐ二本の大きな河川の水を灌漑用水として、大規模な緑化事業を行ったんです。



一時的には大成功して、半砂漠地域が綿や麦、稲の育つ広大な畑に生まれ変わったのですが、二本の川の水は、アラル海に注ぎ込む前に使い尽くされてしまった。この事態に先駆けて、アラル海の縮小を危惧する声もあったのですが、当時のソ連共産党大会の報告書を読むと、「我が社会主義国家に綿ができる。これは社会主義制度の勝利である。そのためにアラル海が無くなってしまおうのであれば、アラル海は美しく死ねば良い」と書いてあるんです。その続きに、会場からは鳴り止まぬ拍手……とありますから、これはもう国家権力が絡む、政治が絡む、経済が絡むことで、単なる水の問題ではないんですね。

森 地球環境問題は、経済はもちろん、産業、農業、工業、すべてが絡んだ複雑怪奇な事象と言わざるを得ない。



地域から人間の生き方を正すことが重要

日高 大抵、そこには宗教やジェンダーといったことも絡んできます。

地球環境問題は、必ず地域に起きる。原因と対策は、それぞれの地域に

日高 その一方で大切なのは、現実には起きる地球環境問題というのは、必ず地域に起きるということです。環境問題と言うと、まず地球温暖化で、地球全体に共通した問題だと考える人も多いでしょうが。

森 問題の起り方が地域によって異なるのですか？

日高 そうです。地球温暖化と言っても、北極では氷がとけ、海面の上昇や気温の上昇が見られる。けれど、ある場所では、空気の乾燥が進み、砂漠化する。ある場所では雨が多くなり、洪水が増える。それぞれ別の対策が迫られます。でも、問題はどれも地球温暖化なのです。地域でそれぞれに起きる異質の問題が集まって、地球環境問題になっているのですから、現実的な起り方はそれぞれの地域によって違うということ、そして対策も違うということを考えなければなりません。

森 ローカルな視点が必要なんです。私も含め、グローバルな問題だと考えていた人には、これがイリユージョンなのかもしれない。

地球環境学は、 科学と人間の価値観、世界観が 融合した新しい学問

日高 だから地球研は、とにかく人間の生き方の問題として、そこから考え直していこうという姿勢なんです。その地域には、どんな要素があつて、自

然とどう絡んでいるのか。それが分かれば、その地域が少しでも問題から抜け出すために、どうすればいいのか探れるはず。なかなか見つからないかもしれないですが、探るんです。続けているうちに、価値観の問題が入ってきて、それが本当に良いことなのか議論ができる。それで皆が、これは必ず

しも良いことじゃないと思つたら、少しは世の中が変わる。変われば前よりは、少しはいい生き方ができるかもしれない。我々は人間ですから、人間中心主義になるのは仕方ないんですが、無意味な人間中心主義は変えなくてはいけない。段々と変えていくしか、方法は無いと思います。

【地球研の紹介】

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

総合地球環境学研究所

地球環境問題の解決に向けた総合的な学問構築のため、2001年、文部科学省の大学共同利用機関として創設。地球環境問題の根源は人間の生き方、つまり人間文化の問題にあるという認識に立ち、問題解決への学問的道筋を探る。仮住まいしていた京都市内の旧小学校から、今年春、同市内北区上賀茂に完成した新しい建物に移転。



和室の「離れ」でつろぐ、交流室



環境関係の多様な
文献が並ぶ図書館



オープンな空間の研究室

森 そこで私は、つい急いでしまつて、早く議論しよう、早く考え方を変えよう、いやもう革命だと言つてしまふんですが(笑)。

日高 革命を起こせば、必ずその弊害が出ます。解決の道筋は、第一に、色々な方法で説明する。それがわかれば第二に、今後どうすれば良いのか道を探る。そして第三に、その話をできるだけわかりやすく社会に伝える。今までやつてこなかったことをやってみようという話ですから、これは価値観、世界観の問題です。地球研も、最初は学術審議会の建議で、「地球環境科学研究所をつくりなさい」ということだったんです。しかし、僕が準備委員長になつて、この研究所の意義の一つは、僕らの価値観を変えることにもなろうから、科学とつくと価値観の問題が持ち込まれない。だから「科」の字は邪魔になるから、取りましようということになつたんです。科学とは探求する学問ですから、もちろん学問としてやります。しかし、価値観は無しと切つてしまつては、多分、意味がない。

森 「科」の字を取ることで、文系と理

系の観念を融合することができるといふことです。しかし、科学者や研究者の皆さんは、これまで自分の研究分野の専門性を深めることが使命でしたから、価値観や世界観を融合させなさいというのは、難しい要求になりませんか。

「総合」とは五目チャーハン。 それぞれの素材を、かき回し、 熱を加えて、まとめて食べる

日高 それが「総合」であり、一番大切なところなんです。ふざけたような言い方ですが、僕は「総合」とは五目チャーハンだよ」と言つてます。これまでよりもっと美味しい五目チャーハンを作りたいから、総合的に考えましよう。それで、米や油、肉や卵のそれぞれ専門家が集まつて、各々が自慢できるそれぞれの材料を持ち寄つてくる。でも、材料を並べただけじゃ五目チャーハンにはなりません。フライパンに放り込んで熱を加え、かき回して、まとめて食べる。五目チャーハンの本質はここですよ。それが、つまりは総合だと言つ

てるんですが、海外でもそれはよくわかる表現だと言われました(笑)。

森 なるほど。地球研のフロアには研究者ごとの個室がなくて、非常に風通しが良さそうだと思つたのですが、それは互いがフライパンの中で混ざり合うことを狙っているんだ。

日高 そうです。今、地球研では、特定の地域が抱える問題に取り組み、十数本のプロジェクトが進行中です。それぞれ20〜30人程度の研究者や専門家がグループを組みますが、彼らの専門領域はそれぞれ異なります。仕切りのない大部屋で、分野を横断して、異なる分野の仲間が、同じ一つの問題について意見を闘わせることが狙いなんです。プロジェクト毎の大部屋ですが、トイレや食堂に行く時は、他のプロジェクトの大部屋を通らないと行けない設計ですから、他のプロジェクトについても嫌でも目に入ってくる。この設計は動物行動学的にも理にかなっていません。プロジェクトが蛸壺化してはいけません。

森 それも日高先生が率いる研究所らしく、ユニークです(笑)。



理系と文系の融合が「総合」となる

私は、地球研が地球環境問題をどのように紐解いていけるのか、三つ目に言われた、社会にわかりやすく伝えるという点に、特に期待しています。本日はどうもありがとうございます。

●日高 敏隆 著書の紹介●

※価格はすべて税別です。

自然保護や植林って、本当にいいことなの？
『子どもたちに語る これからの地球』
講談社 (2006.07) ¥1300

私たち人間はどうなるのか？
『生物多様性はなぜ大切か？』
昭和堂 (2005.04) ¥2300

人生を決めるのは、結局のところ何なのだろう？
『人間は遺伝か環境か？遺伝的プログラム論』
文藝春秋 (2006.01) ¥710

春が来れば虫が動く、でもどうやって彼らは春を知るのでしょうか

『春の数えかた』
新潮社文庫 (2005.02) ¥400

生きものたちの知られざる営みを、分かりやすく
『人間はどこまで動物か』
新潮社 (2004.05) ¥1300

身近な生き物の意外な生態、ウンのような本当の話
『ネコはどうしてわがままか—
不思議な「いきもの博物誌」』
法研 (2001.10) ¥1600

ヘビはなぜ長い？それには理にかなった理由がある
『動物の言い分 人間の言い分』
角川書店 (2001.05) ¥571

●総合地球環境学研究所 所在地 / 京都市
北区上賀茂本山457-4 〒6003-804
TEL: 075-707-2100 (代表)
http://www.chikyuo.ac.jp

●ひだかとしたか 1930年、東京生まれ。東京大学理学部動物学科卒。東京農工大学教授、京都大学教授、滋賀県立大学学長を経て、2001年から現職。専門は動物行動学。理学博士。

日高敏隆

●もり けんじ 1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州株代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など。
著書 / 「吃音はなある」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎

森建司

未来と共存する企業

リコー 沼津事業所「環境保全」への取り組み

○A・情報関連分野の総合サプライヤーであるリコーグループは、国内に16カ所、海外に9カ所ある生産部門の全事業所で、2002年3月までに「ごみゼロ工場」を達成しました。今後はモーダルシフト（※製品等の輸送手段をトラックによる貨物輸送から鉄道、船舶に転換し、CO₂排出量の削減を図る）やグリーン購入の推進で、グループ全体で2050年までに、2000年度比で事業活動全体の環境負荷を8分の1にするという超長期ビジョンを描いています。今回のM・O・Hレポートは、1999年に「ごみゼロ工場」を達成した、同グループのリコー沼津事業所を見学し、「ごみゼロ化をはじめとする同事業所の環境保全への取り組みについてお話を伺いました。

■沼津事業所の概要

リコー沼津事業所（安達弘事業所長）は1960年に創業を開始。富士山のふもとに位置し、駿河湾にも程近い自然環境に恵まれた立地にある。同事業所は北プラントと南プラントに別れ、その間の距離は約1キロ。どちらも住宅街に接している。

同事業所はリコーの創業製品であるジアゾ感光紙（※国産複写紙の第1号で、今では大型コピーや図面コピーに使用される）の生産から始まり、現在は情報機器が情報を出力するために不可欠な各種サプライ製品（有機光半導体ド

ラム、トナー、現像剤、ジアゾ感光紙、サーマルペーパー、TCフィルム等）のマザー工場として、24時間体制で連続稼働している。また、生産のみならずサプライ製品の研究・開発の拠点でもある。お客様満足（CS）と社会貢献（SS）、社員満足（ES）の、3Sナバーワン事業所をめざし、1975年「デミング賞」、2000年「99日経優秀先端事業所賞」を受賞。1992年にISO9001認定、1997年にISO14001認定。従業員数は958名（2005年3月末現在）。

1999年、ごみゼロ工場達成。
「楽しくなければ継続しない」

リコーグループは1976年という



大変早い時期に社内「環境推進室」を設立し、環境保全活動に取り組む企業のバイオニアとして、これまで日本経済新聞社が主催する「環境経営度調査」で3年連続第1位に選ばれるほか、国際エネルギー機関（IEA）主催のDSMプログラム第1回未来複写機部門で「省エネ技術賞」を受賞するなど、国内外から高い評価を得ている。そのリコーグループにあって、沼津事業所は、グループ全体のエネルギー消費量の約5割を占め、廃棄物の約4割とCO₂の約2割を排出する、最も環境負荷の多い事業所であった。沼津事業所では、1998年から本格的にごみの減量と再資源化に着手し、当初は3年後に据えた「ごみゼロ工場」の達成目標を、わずか1年という短い期間で、翌1999年に達成。現在もごみの排出量の削減及び経費節減を継続しており、環境と経営を同軸とする「環境経営」の先駆けとして注目を集めている。

「楽しくなければ継続しない」という考えのもと、同事業所が歩んできた道のりの一端を、「リコー沼津事業 環境報告書2005」の中からご紹介しよう。

1999年ごみゼロ達成記念に「リコーみのり賞」を授与された。記念モニュメントの前で



全員参加の知恵と工夫を、5つのキーワードで

ごみゼロ化の活動に先立って行われたのが、各部署単位による廃棄物の調査だ。どこの部署で・どの工程で・どのような廃棄物が・どのくらいの量を排出するのか、調査カードを作り、このカードを現物に貼付した。そこから、以下の5つのキーワードに沿って取り組みが行われてきた。

①道筋を探せ（リサイクルルートの確立）

事業所から出るすべての廃棄物について、メーカーへの問い合わせや、新聞雑誌等からリサイクル情報技術を集集したり、産業廃棄物展へ出かけることにより、リサイクルルートを構築する。

②入り口を監視せよ（ごみを買わない工夫）

すべての購入原材料の包装・梱包等について、仕入先メーカーとアイデアを出し合い、無駄な廃棄物を削減しコストダウンを図る。この際、①そのまま再使用できないか、②無駄な

な包装は無いか、③小さな容器から大きな容器への変更、④リサイクルしやすい材質への変更、⑤材質の統一化はできないか、⑥再資源化はできないか、の6つの点をポイントとする。

③廃棄物それぞれの再生品を展示する

どの廃棄物がどんなリサイクル品になるのか展示することにより、リサイクルの状況が一目でわかるようにする。

④リサイクル品の種類を少なくせよ

廃棄物の行き着くところはリサイクル品。この種類をなるべく少なくす

ることは、分別の種類が少なくなるということ。現在、沼津事業所では3120種類の廃棄物を56種類のリサイクルルートにのせて分別を行っている。

⑤分別排出の徹底「まぜればゴミ ければ資源」

分別はリサイクル活動の要であり、各部署の理解と協力、そして無理のない分別方法が必要となる。そのため、分別を楽しくするために設置されたのが、次に紹介する「沼津中央リサイクル市場」と名づけられた資源分別・回収ステーションだ。



商店街? ちょっとのぞくとリサイクル

「沼津中央リサイクル市場」と、環境テーマパーク「エコ道場」

商店街さながらの賑やかな看板で、楽しさを演出

南プラントの敷地内に設けられた「沼津中央リサイクル市場」には、「BAR クリスタル」、「居酒屋おふるろ」、「ブックランド沼津」など、それぞれ回収する

廃棄物を連想させる店名の描かれた看板が掲げられている。クリスタルは電池や蛍光灯、ガラス類など、おふくろは原材料袋、ブックランドはコピー用紙や雑誌、カタログ、新聞紙など。この市場には、56分類された廃棄物のうち、おもに現場や休憩室から出される生活



倉庫が楽しく学べる市場に変身! 何事も工夫次第

ゴミなど26種類の廃棄物が集められる。普通、こうした廃棄物の回収ステーションは、事業所の片隅に設けられるイメージだが、ここでは敷地内のほぼ真ん中に設けられ、建物も屋根のあるアーケード型と、その存在を少しげに主張した印象を受ける。市場への廃棄物の搬入は、午後2時30分からの1時間と決められていて、時間を集中させることで、分別の徹底を図っている。

たのもう! エコ道場では大型画面で「分別真研ゼミ」も開講中

市場の一角には環境テーマパーク「エコ道場」が設けられ、ここでは先に紹介した5つのキーワードの一つ、廃棄物それぞれの再生品を展示している。展示の仕方は、下段に実際に現場や休憩室から廃棄される廃棄物を、中段に中間処理あるいは減量化された姿を、そして上段にリサイクル品、再生品を陳列する工夫がなされている。工場見学に訪れるゲストの中でも、特に子どもたちに、分別排出のルールを、現物を実際に見ながら学んでもらうことを



実物展示でリアルに体験

目的としている。また、道場の中に設置された大型画面で、廃棄物の分別を正しく行えるかをテストする「分別真研究ゼミ」にもチャレンジできる。このプログラムを考えついたのは社員の一人で、他にも別の女性社員が編集からコピーライティングまで、すべてを担当した小冊子（省エネや沼津事業所のゼロエミッションへの取り組みについて、子どもたちに向けて楽しくわかりやすく紹介している）が配布用に設置されるなど、全員参加の姿勢が、高いレベルで継続されている。

「これはどれかな?」迷って学ぶ



真剣に“分別真研ゼミ”をしています

こうした姿勢に至るまでは、例えば廃棄物の分別については、手作りのモデル分別ステーションで分別方法の全社水平展開を図り、また、分別がわからないものについては、「迷い子BOX」で一旦回収し、正しい分別方法を排出部署に追って周知するなどのフォロー体制があった。現在も、前述の「分別真研ゼミ」を、全社員が各自のPCから受講でき、受講した回数とその結果についてのデータが、一括して蓄積・保存されている。

エコノミーでエコロジックな コージェネレーションシステム

エコ道場の展示物に並んで、電車のミニ模型と、その横に1台の自転車置きされている。自転車は発電装置で、ペダルを漕げば、電車がレールの上を走り出す。これは子どもたちにクリーンエネルギーについてを紹介するためのアイデアだ。



ペダルの一踏みで電車を走らす。こぐのだ!

ここまで同事業所のごみゼロ化をクローズアップし、省資源、リサイクル化について的一端を紹介してきたが、



コージェネレーションの状況が即刻管理できる

それとともに、省エネルギー、汚染防止への取り組みが、高い基準のもとで展開されている。省エネルギーへの取り組みの一つ、1999年度に導入されたコージェネレーションシステムは、同事業所で必要な電力の約半分について、熱エネルギーの供給源を、重油からクリーンな都市ガスに燃料転換し、自家発電に切り替え、さらに発電時に発生する排熱をボイラーに回収して熱エネルギーに再利用する。これにより、CO₂の排出量を、年間約30000トン削減できる。

〈インタビュー〉

株式会社リコー沼津事業所
画像生産事業本部
RS事業部
沼津総務センター
環境安全推進グループリーダー

白井 清貴

やるからには成果を出す。 「一石全鳥」の考え方で

リコー全体の環境への取り組みは、基本的にトップダウンの姿勢です。弊社では、「世界一の低コストのもの作り」という方針に基づき、生産プロセスの改善・改革に取り組んでいます。コストが下がれば、環境にも必ず効果を発揮します。以前の企業の在り方は、コスト削減なら、それだけを視野に入れ、結果を評価しました。しかし、現在はコストが下がれば環境にも効果がある、生産性が2倍になれば、生産工程でのCO₂排出量が2分の1になるというように、多面的な評価がなされます。

言い換えれば、環境の視点からも結果を評価する姿勢がトップにあること

で、新たな環境技術が創造されるのであり、さらに社員一人ひとりの環境に対するモチベーションを高め、それを持続することが可能になるのではないのでしょうか。その点で、弊社内には、環境への取り組みは、業務の一つであるという意識が浸透していると思います。

私たち環境安全推進グループの役割は、業績目標や環境目標など、様々な課題を達成、実現するために、どういったフォーカスが社内に必要なを考えることです。特に沼津事業所では、新たな一石を投じるのであれば、「一石全鳥」で、全部署への波及効果を狙っているという方針があり、この点でも創意工夫を重ねることが大切になります。しかし結局は、楽しくなければ継続できない、遊び心のあることに尽きると思います。どうせやるなら楽しく、それを実現するには、社員同士のコミュニケーションがとれるかどうかにかかっていると思います。このことは、環境保全への取り組みだけでなく、企業活動のすべてに言えることだと思います。会話さえあればうまくいくのという状況は、職場にも地域にもたくさんあるのではないのでしょうか。

ここにも注目!

安全への意識をスパイラルアップする体感機

写真は「ロール巻き込まれ体感機」。ロールを掃除する際、もしウエスがロールに巻き込まれたら、瞬時にウエスを離さなければ手を巻き込まれてしまう。しかし、反射的にウエスを引き抜こうと手が出てしまうことを体感し、自覚することで、安全性を高め、現場での生産事故を未然に防ぐ手段としている。他にもボール盤巻き込まれ体感機、溶剤ガス爆発危険体感機など、オリジナルの体感機が備えられている。



●リコー沼津事業所 Ⅱ 〒410-8505
静岡県沼津市本町甲 16-1

愛知県長久手町「ゴジカラ村」訪問記

老いも若きも、自然のサイクルで 共に暮らしてみませんか？

名古屋市の東部、愛知県長久手町にあるゴジカラ村は、社会福祉法人「愛知たいようの杜（もり）」が運営する福祉、教育の複合施設です。4ヘクタールの広大な敷地は、複数の施設と雑木林から成り、「時間に追われない暮らし」をモットーに、高齢者が長生きを楽しみ、子どもが日々、成長しています。このゴジカラ村で、シルバーとヤングのユニークな共生が実践されると聞き、現地を訪ねてみました。



「わああ、やっとなのが、いいんだわ」吉田さん

ゴジカラ村を象徴するのは 「雑木林」

老いも若きも「立つ瀬」がある

愛知県長久手町の一角にあるゴジカラ村。大人も子どもも、会社や学校の枠組みから解放され、自分本来の「個」の暮らしに戻っていく「午後5時から」、つまりアフターファイブという意味に、その名を由来する。

村内には、特別養護老人ホームやシヨートステイ、デイサービスセンターなど、高齢者介護のための施設ととも

■社会福祉法人「愛知たいようの杜」

理事長 吉田 一平

■愛知県長久手町

愛知たいようの杜（通称ゴジカラ村）

■2006年7月14日

に、幼稚園や託児所があり、さらに古民家や温泉、今年6月に完成したばかりの村営モデル住宅が、不規則に同居している。その不規則な配置を一つに繋げ、一つにまとめる役割を果たすが、豊かな雑木林だ。

このゴジカラ村の管理業務を行うゴジカラ村役場に、社会福祉法人愛知たじょうの杜（通称ゴジカラ村）の理事



ゴジカラ村役場、手作り感満載

長、吉田一平さんを訪ねた。

「ゴジカラ村は、昭和56年に開園した幼稚園から始まったんです。子どもなんてのは、遊ぶのが仕事ですよ。だから園の方針は、絵も描かなくていい、唄も歌わなくていい。ただ、子どもが遊ぶ最中に、隠れることができるような場所だけ確保してあげようと。まわりからは非難の声もありましたけど、そんなことは気にせず、自分たちがやりたいことをやるうと続けてきたら、今のカタチになったという感じです」

時間に追われない国の尺度は、遠回りすればするほど、多くの人が楽しめる。

吉田さんは長久手町に生まれ、高校卒業後は地元を離れ、商社に勤務した。サラリーマン時代は、「時間に追われる国」の住人だったという。

「時間に追われる国っていうのは、最短距離を最高の効率で行くんです。悪いところを切り捨てると、いいところだけになると思っている。でも、そんなことは絶対じゃないでしょ。いいと

ころを取り入れると、悪いところも必ずついてくるんです」

15年間のサラリーマン生活に別れを告げ、吉田さんは「時間に追われない国」で、ゆっくりと暮らすことを選んだ。その国は、吉田さんが高校卒業までを過ごした、古き良き因習の残る長久手の町そのものだったのかもしれない。

「雑木林みたいな暮らしをしたいと思います。お互いが干渉しあって暮らす。当然、わずらわしいことや面倒くさいこともいっぱいあるんだけど、そこでは年齢や立場に関わらず、誰もが必要とされる。お互いの存在価値が認められ、老いた者にも、若い者にも立つ瀬がある。これが一番大事だと思うんです」

その言葉通り、ゴジカラ村は不便で手間ひまのかかるコミュニティをめざし、行政や業者に頼らず、できることは自分でやることをモットーとしてきた。道のデコボコを直したり、看板を作ったり、一人ひとりに役割があるからこそ、居場所がある。ともに汗をかき、美味しい酒を飲み交わす、「共汗共酔」の暮らしをめざした。

価値が無いと思われるものの中に、実は大切なものが含まれている

もともとゴジカラ村の敷地は、長久手の人々にとって必要な生活雑木林(里山)だった。1970年代の頃、区画整理が始まり、雑木林は次々に姿を消していった。1981年、吉田さんは、これ以上、雑木林を失わないためにも、この地に幼稚園を開園することを決めた。幼稚園の経営にはまったくの素人だったが、価値が無いと思われるものの中に、実は大切なものが含まれていることを、子どもと一緒に探ってみようと、時間に追われない国づくりの第一歩を踏み出した。手に入れた敷地には、植生学の権威であり、日本、中国、東南アジアで植樹活動が続け「3000万本の木を植えた男」とも言われる宮脇昭氏の助言を得て、1万本の木を植樹した。木を残すことや、木を避けることを優先して建物を設計し、配置した結果が、現在のゴジカラ村の風景だ。

村内を歩けば、畑もあり、茶房もあり、温泉も湧いている。この温泉は「根

嶽の湯」と言い、説明書きの看板には、シワとり、子宝、縁結びの効能があると記されていた。ちなみに根嶽は地名で、掘れば温泉が出てくる土地なのだろうか。吉田さん自身が「ぐちゃぐちゃしている」というように、一般的な複合施設のイメージからすれば、無駄ともとれる楽しみがそこかしこにあり、それがゴジカラ村を豊かにしている。

昼下がり、雑木林の向こうからは、子どもたちの元気な声と、デイサービスの高齢者たちが皆で長唄を練習する声が聞こえてきた。

ゴジカラ村の敷地には、かなり傾斜がある。幼稚園の建物は、積み木の城のように上に向かって延び、それぞれの建物のまわりは、急な斜面になっていく。この斜面は、子どもたちにとって絶好の遊び場で、ズルズルと降りたり登ったりするため、地肌がツルツルに磨かれていた。案内をしてくれたゴジカラ村スタッフの川本祥治さんいわく、「ケガもするけど、知恵もつくですよ。こんな危険な幼稚園と思う保護者は、よその幼稚園を選ばないんです」

園では、冷暖房をいれずに、夏の暑

さと冬の寒さをそのまま受け容れる。自然とつきあうには、あきらめること、我慢することを学ばなければならないことを、子供たちは肌で感じ取っている。ワイルドともとれる園の方針は、開園当初、地元の人々から非難された。しかし、町の開発が進む中、都心部からの流入者層に園の方針は支持され、定員は数年後に満員になった。

「ちょうど昭和30年代頃に生まれた保護者たち自身が、時間に追われる国に疲れ、疑問を感じ始めた時期と重なったんでしょうね」

ゴジカラ村に完成した 村営住宅は、高齢者夫婦と 女子学生が共に暮らす二軒家

幼稚園のそばに、洒落た一戸建て住宅があった。デザインナーズ村営住宅の第1棟で、現在、モデル住宅として自由に見学でき、1泊6000円(1人)で、体験入居もできる。

中に入ると、コンクリートの土間があり、奥にはキッチンが備えられている。土間に直接テーブルを置けば、ダ

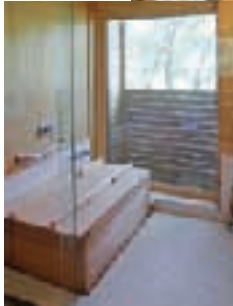


このテラスがオススメ、時を忘れる。

木立に囲まれた村営住宅



ひのきのお風呂



くつろげるベッドルーム

2階から1階が見れる、オープンな空間

この家で、吉田さんが描くストーリーは、高齢者夫婦と女子学生の同居生活だ。

この家で、吉田さんが描くストーリーは、高齢者夫婦と女子学生の同居生活だ。

イニングとしても利用できる。大きな窓からは雑木林が見え、窓を開ければ、心地よい風が家の中に入ってくる。土間を上げるトリピングがあり、奥に寝室がある。床はすべて木材仕上げで、窓枠やカーテンレールの細部に至るまで、すべて木材で統一されている。寝室横のバスルームにはヒノキ風呂があり、室内には木の香りが漂っている。寝室の外に備えられたバルコニーは、椅子を置いてまどろむにも気持ちの良さそうな空間だ。2階にも寝室とユニットバスがあり、窓際には書斎代わりのスペースが設けられていた。

「家族のことを考えて、家を離れ、老人ホームに入所する高齢者は少なくありません。ゴジカラ村なら、歳をとって身体が不自由になっても、村内の施設で働くヘルパーさんが、この家に来て介護をしてくれます。最後まで自分らしく暮らせるように、ひと足早く自立した生活を選択してもらいます。2階部分を近所の学校に通う女子学生に賃貸することで、家賃収入も得られますし、休日にはその友達も遊びに来たりして、生活に賑やかさや活気が出るでしょ」

この家は、ゴジカラ村応援団のA会員となり、1000万円でゴジカラ村役場の株式を購入、加えて4000万円の入村金を支払い、村の一員となることで提供される仕組みだ。売り渡し物件ではなく、入村者がこの家で生涯を終えれば、また次の入村者へと引き渡される。

町内にある「ぼちぼち長屋」は、若いOLに「ちゃぼまし料金」を

同居の相手として、女子学生ではな

くOLでは駄目なのですか、と聞いてみたところ、既に同町内にある福祉コミュニティ「ぼちぼち長屋」で、高齢者が若いOLや子どもがいる家族と共に暮らしているそうだ。

簡単に説明すると、ぼちぼち長屋は共同住宅であり、福祉施設ではない。高齢者には、各々のケアプランに基づき、介護保険の在宅サービスが提供される他、NPOが24時間サポートする。高齢者と子どもがいる家族、OLはそれぞれ対等な関係で、家賃は同一金額が設定されている。ただ、高齢者とのふれあいをすすんでやってみようというOLには、家賃の一部を免除するとして、毎月「ちゃぼまし料金」が支払われるという仕組みだ。ちゃぼまし料金とは、昔、このあたりではちゃぼを飼う家庭が多く、ちゃぼの世話は年寄りの仕事で、それがボケ防止や健康維持にもつながった。若いOLとのふれあいは、ボケ防止にもつながり、何よりそばに若い人がいるというだけで、安心できる。ちゃぼよりみただろうということ、このネーミングがついたのだとか。

手が空くところに来る、何か仕事がある、案内所。



ぼちぼち長屋



暑い日はスイカがおやつ、集会所。



幼稚園入り口



ケアハウス

OLや女子学生へのこだわりは、行政的にはタブーとも思える。でも、そうではないと吉田さんは言う。

「なにか法律を超えたところではないと、たぶん楽しさというのとは出てこないんじゃないかと思う。それに、高齢者には色気がないと思うこと事態が不自然でしょ。若い女性なら、自然とまわりに若い男性も集まってくるだろうしね」

高齢者が、高齢者だけの世界に引きこもらず、様々な世代と混ざること、社会とのつながりを実感できれば、それは、今後さらに高齢化が進む日本で、一つの理想の形となるかもしれない。

何をやれば自分たちは 楽しいのか？ 楽しい場所に、人は集まる

吉田さんのまわりには、頼りになるスタッフが大勢いる。ゴジカラ村の顔ともいえるべき役場スタッフの田中美貴さんは、吉田さんから「あんたが疲れた顔をしてたら、誰も来なくなるよ。だから仕事はせんでいい」と言われたそう。実務に追われて、自分がこの村でやりたいことや、楽しむことを忘れてはいけない、ということなのだろう。

吉田さんがやりたいと思う事業の採算を考え、時にはブレーキをかけることもあるというNPO法人「ケアサポート いぶき」の代表理事、鈴木善道さんは、吉田さんのいいところを、「この人は理論家でも哲学者でもなくて、自分がいいと思うことを実践してきただけ。福祉や地域ということに対して、上から物を見下ろすんじゃないくて、下から突き上げてここまで来た。そこが頭だけで考える人と、決定的に違うんですよ」と話してくれた。

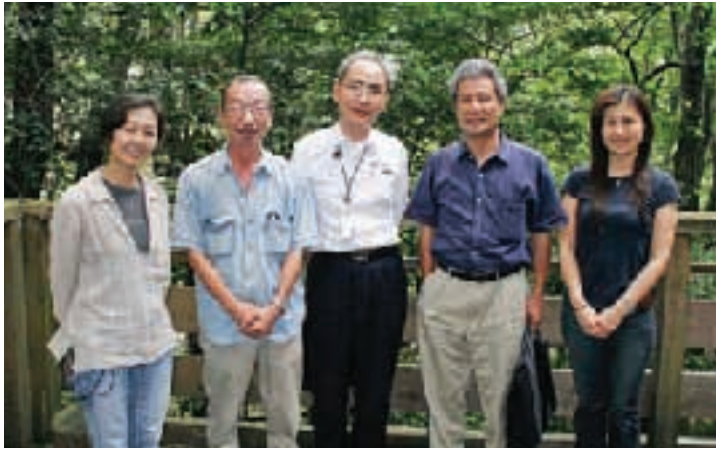
先ほど幼稚園を案内してくれた川本祥治さんは、吉田さんの幼なじみで、務めていた会社を定年退職後、ゴジカラ村のスタッフに名乗りを上げた。

「一平さんは10歳のままですね。競争心とか計算高いという言葉に縁がない。初めてこの村を見学に来て、幼稚園や雑木林を見たときは、随分と無茶をやっているなと思いましたけど、この人は相手に、自分も何か間に合おうという気にさせるんですよ。私は、自分も小学3年生ぐらいに戻りたいと思って、ここに来てるんです」

最後に吉田さんは、淡々と語ってくれた。

「自分がやりたいことをやってきただけ。赤字になっても、自分が本当にやりたいことなら、何とかしようという気持ちになれる。採算を合わせようとか、最初から物事を完成させようなんてことを考えたなら、何もできないんです。だから、勉強のしすぎはよくない。何をやれば自分たちが楽しいのかを考えないと。ゴジカラ村は、不便で

手間ひまのかかる生活が好きだという人に、これからも出会っていきたいね」
時間に追われる国で、問題は解決し、物事は完成させるものだとしたら、ここでは問題は皆で共有し、物事は不完成のまま、皆の間を巡る。だからこそ、



「私たちがサポートします」

誰もが口をはさめ、手も出せる。

ゴジカラ村を象徴する雑木林——。
何年か、何十年か後に、この雑木林での思い出が、誰かによつて語られるかもしれない。それだけで、雑木林には大きな価値がある。時間に追われない国の、時の流れはとでもゆっくりだ。

吉田一平

●よしだ かずひら 119
46年、愛知県長久手町生まれ。15年間のサラリーマン生活を経て、1981年「愛知たいよう幼稚園」開園。1987年、社会福祉法人「愛知たいよつ杜」を設立後、特別養護老人ホーム、在宅介護支援センターなどを次々と設立し、1992年「もりのようちえん(自然幼稚園)」開園、1993年「もりのがくえん(愛知総合福祉看護福祉専門学校)」開学。現在、ゴジカラ村村長を務める。

●社会福祉法人愛知たいよつ杜Ⅱ所在地／愛知県愛知郡長久手町大字長秋字根嶽29番地の4 〒480-1113
●ゴジカラ村役場株式会社

TEL／0561164-5737
FAX／0561164-5738
<http://gokikamura.jp/>

ふれあい

第四回

『もったいないお化け』

中井 二三雄



ある霧の深い夜のことでした。小学生の由紀子たちは、やっとの思いで、山の中の小さな食堂にたどり着きました。もっと明るくきれいなところにしたかったのですが、お父さんが道を間違えたからなのです。

おなかの空いていた家族は、ブツブツ

言いながら中へ入りました。うすくらい店内には、テーブルといすがポツンとあるだけ。店の人もあまりしゃべりません。長く待って、やっと注文の品が運ばれてきました。ガツガツと食べるみんな。由紀子が「トマトきらい」と言って残そうとすると、耳元で「もったいない」と声

がしました。みんなは気づきません。だれも信じてくれません。

お兄ちゃんが、「チキンよりビーフがいい」とお皿のすみにかたづけると、また「もったいない」の声がお母さんが「ケーキは太るから」と手をつけずにいると、「もったいない」「もったいない」。お父さんがタバコを吸おうとすると、「せつかく今までやめたのに、もったいない」。

姿こそ見えなかったけれど、何かが空中を飛びながら、家族みんなの心に、「もったいない」精神をしみこませたようでした。それからの家族は、「もったいない」が挨拶語のようになりました。

でも、みんな決してケチになつたのではなく、物を大切に作る心や作つた人に感謝することを覚えた、大切な夜になつたのでした。

中井二三雄

●なかい、ふみお1949年、守山市生まれ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、1976年からフリーライター。日本シナリオ作家協会理事、滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

企業、行政、NPO、 括くりを超えて共生するために

一人ひとりが主役の「つながり」を提唱する、コンセプト・デザイナー佐藤修さんに聞きました
湯島天神で知られる東京・湯島に、佐藤修さんのオフィスがあります。このオフィスで佐藤さんが手がけるのは、企業、行政、NPOと、共に新しい価値を創り出すこと。そして、それぞれがつながりあうことをめざして、佐藤さんのプロジェクトはどんどん広がっています。

コミュニティケア活動支援センター事務局長
(株)コンセプトワークシヨップ代表

佐藤 修さん



脱・組織人した
理由は？

企業デザイン、事業デザイン、地域デザイン、組織デザイン、イベントデザインなど、広範な分野でのコンセプトデザインワークと、それらを実現するためのプロデュースワークが、コンセプト・デザイナーの肩書きを持つ佐藤修さんの仕事だ。本人曰く、「引き出しが多いと言ってくれる人もいますが、テーマがない、

専門性がないとも言われます(笑)」。しかし、対象が企業、地域、組織の何れであっても、そこに関わる「一人ひとりが主役」にならないければ、という点で、佐藤さんのポリシーは一貫している。

佐藤さんは1989年に、それまで25年間勤めた「東レ」を退社し、「コンセプトワークシヨップ(以下CWS)」を立ち上げた。東レでは、自身が先頭に立ってC I(企業文化再構築戦略)の導入をトップに提案し、そのためのプロジェクトを中心となって推し進めた。働く中で実感した「もっと生活者に寄り添い、生活に密着したところでビジネスを展開しないと、会社の将来はない」、「従業員一人ひとりが主役にならないと組織は元氣にならない」、この二つを自社のC Iに込め、プロジェクトの任務を終えたのは、ちょうど入社25年目のことだった。その直後に退社を決意したが、自信をもって独立に臨んだのかという点、佐藤さんの場合は少し違う。

「企業の在り方を考えるうちに、結局問題なのは、自分の生き方なんだ、というところに行き当たってですね。これまでの四半世紀を組織人として生きて

から、これからの四半世紀は、違う生き方がしたいと思ったんです」

小さな世界に閉じこもり、自分たちが絶対だと思ってるから、異分野との「コミュニティシヨップ」が成り立たない

会社を辞めた翌日から、佐藤さんは地元・我孫子市(千葉県の駅北口に駐輪場をつくるという住民の話し合いの場に参加した。

「初めて住民活動というものに参加したのですが、集まっているのはお年寄りや、小さな子どもを抱えた若いお母さん方で、働き手の中心となるような人はいないんです。行政も未だに「お上」体質で、自治会は行政から言われることを何となく受け容れる末端組織ではない。住民活動といっても、実体は無いに等しいわけです。これじゃあ自治会なんて言えないだろうと発奮したのが、後々、まちづくりやNPOの活動支援に、はまっていくきっかけです」

同時に佐藤さんは、コミュニティシヨップについて、考えを新たにするいくつ

かの場面に遭遇した。

「一つは、行政と住民の間に、コミュニティシヨップが成り立っていないという事実です。その原因となるのは、言語の違いで、行政が使う言語に、住民は平べったいイメージしか持てない。だから、こう言った言わないの水掛け論になってしまふ。もう一つは、それまで組織人だった自分の経験を通じて、話し合いとは、問題解決に向けてトントんと進むのが絶対だと思っていました。しかし、町内会の集まりで話していると、決まったようでは決まらないというケースが多いんです。何となくこれはいこうかとなっても、誰かの一言で振り出しに戻る。最初はそれがまったく無駄なこと感じたのですが、そのうち色々な意見があつて、色々な生き方があるというのが認められるようになってくると、チャタラチャタラであっても、それはそれでいいことではないかと。問題は、それぞれが小さな世界に閉じこもって、それぞれ自分たちは絶対だと思っているから、お互いにコミュニティシヨップが成り立たないという点にあるんです」

みんなのものⅡ「コモンズ」 の回復・共創

その両者をつなぎ、何かを創っていくことはできないかと考え、CWSの起業に至った。何が創れるのかは、経験を積まなければわからないと、そこから5年余りの歳月をかけて、各地の住民活動を見てまわった。その中で見えてきたのは、「かつて存在したみんなのものが、いろいろなどころで失わ

れている」ということだった。

「鎮守の森や入会地、河川敷だとか、その地域の人みんなんで使う場所が、昔はあったんです。加えて若衆宿とか、消防団もその一つだと思えますが、自分たちの組織というのもあった。それが今は、すべて崩壊しつつあるでしょ。同時に自分たちの地域という意識や感覚も、とても希薄になってきているんです。これは、会社にも同じことが言えます。私が東レに入社した昭和

39年当時は、工場で働く工員にも、俺たちの会社という強い意識があった。だから、会社が間違っていると思ったら、自分の会社を守ろうという意識が働いて、会社にはつきりと物を言う姿勢があった。

発表風景



でも、多分80年代頃から、そう

いう意識は薄れて、会社は経営者のもの、今だったら株主のもの、そう考える社員が増えてきた。自分のものじゃないから、何も物を言わなくなる。その結果、いわゆる企業不祥事が頻発し、なくなってしまう企業まで出てきてしまった」

佐藤さんは、みんなのものを「コモンズ」という言葉に置き換え、「コモンズの回復」をCWSのテーマに、様々なプロジェクトに関わって来た。CWSのスタンスは、「誰かに依頼してコモンズを回復するのではなく、自分たちの手で少しずつ取り戻す」、当事者と一緒になって、新しいコモンズを「共創」していくことだ。

「行政からの依頼であっても、私は行政のための仕事はしませんよと申し上げるんです。私がやるのは、住民の視線で物事を考え、住民と徹底的に話をさせてもらうことです。例えば、町の総合計画を外部に依頼するのであれば、コンサルタントベースで美しい計画書が上がってきます。でも、私は美しい計画書なんか上げません(笑)。住民とトコトン話し合って、話し合いのプロ

セスで生まれたものが、おたくの町の総合計画ですよと、こうなるんです」

従来とは違うNPO支援の仕組み。「金の切れ目が縁の始まり」を合言葉に

そんな佐藤さんの姿勢に注目した住友生命社会福祉事業団から、「従来とは違うNPOの支援の仕組みを作って欲しい」と依頼が来た。各地の住民活動



コミュニティケア活動支援報告書

を見てもらった経験で、佐藤さんにはNPOと多くの接点があった。

「私も日本のNPOの形には疑問があったんです。行政や企業は、資金を助成しても、活動の中身にはあまり関心がなく、報告書さえ提出してくれば良いという姿勢だし、NPOの活動自体についても、本場に現場につながっていない人がイニシアチブをとっているとい

うケースも多いでしょう」

佐藤さんは依頼を引き受け、2001年にCWSのプロジェクトの一つとして、コミュニティケア活動支援センター(通称コムケアセンター)を設立した。コムケアの活動支援プログラムは、全国から応募のあったNPOに対し、公開の場で選考し、資金助成を行うが、それはあくまで入り口であり、佐藤さんは、資金助成について、今後どんどん縮小していきたいと考えている。

「資金助成という支援方法は、今後、最小限にしほっていきたくと思っています。そのかわり、どんなことにも相談に乗りますよというのが、他の資金助成プログラムと決定的に違う点なんです。例えば、プログラムに応募する際の申請書の書き方にだって相談に乗って、プロジェクトそのものを一緒に創りあげていく。選考に通っても落ちても、どんなことでも相談に乗るんです」

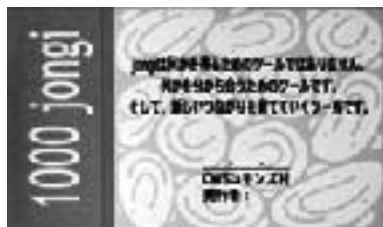
コムケアは、「金の切れ目が縁のはじまり」を合言葉に、人や策、時には場所を、各々のNPOに対して提供している。



コムケア仲間のサロン

「CWSの本業は企業コンサルタントですが、コムケアのように、何でも相談に乗りますと大見得を切っちゃうと、本業をする暇がなくなるんです。税理士さんから、そろそろ本

異分野の人間同士でも、気楽に話し合える「コムズ村」をオープン



地域通貨「ジョンギ」

業で稼いでくださいと言われて、じゃあそっちに戻ろうかと(笑)。社員を抱えていれば、絶対にこんなことはできませんから、組織人でなくなった最大のメリットですよ。それに、いろいろなことをやっているから、誰かが助けてくれて、何とかなるという面もある。世の中、うまくできてます」

CWSでは、毎月最終金曜日の夜に、「コムズ村」の集いが開かれる。首都圏には案外、人のつながりが無いことに気づいた佐藤さんが、自ら村長となつて、誰でも気楽に情報交換をしたり、雑談のできる場としてオープンさせたスペースだ。村の唯一の掟は、「楽しく元氣な村が育っていくように、それぞれが良識を持ってコンヴィヴィアル(自立共生的)に生きること」。コムズ村の通貨として、「ジョンギ」の流通も始まった。ジョンギを使うと、他の村民からの要請を断れない仕組みで、佐藤さんも、これで大分県まで出張したのだとか。

「ジョンギは情誼と書くんですが、北陸では我々の二世代ぐらい前の人が、皆さんに情誼にしておきなさいよ、とい

う風に使ったそうです。迷惑をかけないようにとか、おもてなしとか、広い意味でケアに相当します」

コモンズ村も、個人同士のつながりを目指したもので、一人ひとりの人間関係が豊かになることで、新しい価値の創造につながると、CWSのプロジエクトに新しく加わった。佐藤さんの活動は、今後もうこうして、アメーバ状態に広がっていくのかもしれない。

人と人のつながりが、
まず出発点になる

最後に、佐藤さんに「まちづくり」について聞いてみた。「自分たちの町だという感覚を、住民がどれぐらい持っているかがポイント。色々な方法がありますが、一つは、自分たちの地域をよく知ること。これまでの「まちづくり」は、地域のことをろくろく知らない人たちが、かき回してきたパターンが多かったです。住民が知恵を出す主役になれば、「まちづくり」のコンセプトやブランドデザインは、自ずとできてくるはず。それを行政が頑張ってやっちゃ

うといけない。もう一つは、物語があること。土地の記憶から出てきた歴史的題材であるとか、物語があれば、それは絶対、強みになる。それを住民たちが自分でどう見つけるかだと思います。ど



コモンズ村の定期寄り合い

の方法にしろ、成功のための出発点は、話し合うということです。人と人のつながりが、まず出発点になるんです」
奇抜な取り組みではなく、素朴な語らいが、埋もれているものを活性化化する一番の早道なのだ。

佐藤修

●さとう おさむ 1941年、東京生まれ。東京大学法学部卒業後、東洋レーヨン(株)(現東レ(株))入社。経営企画室勤務等を経て1989年3月に同社を退社。同年、(株)コンセプトワークシヨップ設立。「コモンズ」「共創」をテーマに、企業・行政・NPOらと企業変革、街づくり、福祉など幅広い分野での新しい価値の創出プロジェクトを手がける。コミュニティケア活動支援センター事務局長。

●(株)コンセプトワークシヨップ所在地
東京都文京区湯島3-20-9-603 〒113-0034
TEL: 03-5681-0000
<http://homepage2.nifty.com/CWS/>

(自転車+旅+環境問題) × 全国の仲間 = ちゃりきゃら!

■8月22日

■彦根市内にて

「自転車きゃらばん'06」～きゃらばん隊の旅をクローズアップ

今年、第11回を迎える「自転車きゃらばん」は、全国から大学生を中心とした参加者を募り、夏休みの1ヶ月間を利用して、自転車で日本各地をリレー形式で走行。その間、地域の環境問題を地元NPOや行政から学び、一般市民に向けた環境啓発のアピール活動を行うものです。

8月22日、滋賀県彦根市に集まったきゃらばん隊の皆さんに、これまでの旅を振り返ってもらい、お話を伺いました。



石本貴之(いしもと たかゆき) (22) 滋賀県立大学大学院1年、掛布晴香(かけの はるか) (19) 麻布大学2年、飯塚瞳(いいつか ひとみ) (20) 千葉大学2年、北俊宏(きた としひろ) (20) と歌山大学3年、武田章(たけだ あきら) (19) 静岡大学2年、仲慎太郎(なか しんたろう) (19) 麻布大学2年、加藤浩晃(かとう ひろあき) (19) 麻布大学2年、新宅あゆみ(しんたく あゆみ) (20) 東京外国語大学2年 (順不同、敬称略)

全国でおよそ50名が参加

取材当日の夕方、JR彦根駅前に集まってくれたメンバーは総勢8名。自転車きやらばんの副実行委員長を務める石本君と北陸ルートリーダーの武田君は、8月7日から北陸ルート（出発点・新潟市）の旅をスタートし、前々日、岐阜市内で、同じく8月7日から関東ルート（出発点・千葉市）の旅を続けてきた掛布さん、仲君、加藤君、そして関東ルートリーダーを勤める飯塚さんらと合流。新宅さんは前々日に関東ルートのメンバーと合流し、北君は前日に自宅のある大阪から、自転車持参で電車を利用し、岐阜市内まで移動、この日が旅の二日目となった。

昼間、長浜市内の大型スーパーで、アピール活動を行った後だったが、全員疲れた様子も見せず、話を聞かせてくれた。

なお、自転車きやらばん、06の参加者は、アピール活動への現地参加者も含め全国でおよそ50名。北陸、関東ルートに加え、九州ルート（出発点・長崎市）のグループと8月24日に京都で合

流し、25日から29日にかけて京都府南丹波市で市で開催される「Youth Ecology Gathering 2006」（環境NGOエコリーグ主催によるイベント。環境活動に携わる人々が全国から集う）に参加後、9月7日にゴール地点となる大阪府堺市をめざした。

「ちやりきやら」参加のきつかけと旅の印象

8人が「ちやりきやら」に参加したきっかけはそれぞれだが、大学で環境サークルに所属し、普段から環境活動に取り組むなど、一人ひとり、環境問題への意識が高い。また、環境活動を通じて、他の大学の学生らとネットワークを築いていることにも感心させられる。

去年、友人に誘われて、軽い気持ちで「ちやりきやら」の旅に参加した武田君は、「他の学生が、環境問題にあまり興味の無い人たちに自分たちの想いを伝える姿勢や、夜、環境への考えを語り合う姿に、同じ大学生なのに凄いと触発されて、今年の実行委員とし

て参加することを決めました」

今年、初参加の加藤君は、「家でぐうたらしてるより、楽しい夏になるんじゃないかと思って参加しました（笑）。

アピール活動では、環境問題への意識を高めてもらうことの難しさを痛感したけれど、自分たちの想いを伝えることは、僕にとっても中身の濃い体験。本当は昨日で旅を終えるつもりでしたが、このまま旅を続けます」

さらに自転車の旅は、「日本の国を知らないことに気づかせてくれる。山道が多くて、日本の地形を身体で感じています」（石本君）や、「土地の匂いを肌で感じます。いろいろな地域の、いろいろな世代に出会えることは、貴重な体験」（仲君）と、彼らに様々な収穫をもたらしたようだ。

アピール活動「人と話すことが、段々上手くなってきた」

自転車きやらばん、06は、「地域の環境問題」を大きなテーマとしているが、関東、北陸、九州のグループごとに、それぞれテーマを設けている。

関東グループのテーマは「水」。水にまつわる環境問題の現場を実際に訪れてフィールドワークを行い、アピール活動の場で、その成果を一般市民に向けて報告している。北陸グループのテーマは「景色」。自分たちが守りたい美しい景色を、未来に向けてどのように保全していくか、多くの人と模索しようというものだ。九州グループのテーマは「食」で、食文化を通じて、エコライフを考えようと、それぞれが地域色を打ち出すことで、地域と他地域、さらに地域と行政、NPOとの架け橋になることを目指している。



アピール活動の場は、主に人通りの多いスーパーマーケット等だ。声をかけて一般市民と対話し、「地域の環境問題」について、きゃらばん隊一人ひとりが想いを伝えてきた。

「知らない人と話すのが、少しは上手くなったかな、と思います。積極的に話しかけることを、この旅だけで終わらせるのじゃなくて、地元に戻った後も継続していきたい」（仲君）

また、メッセージキルトを用意し、一般市民の人たちが、それぞれの家庭で環境のために実践していることや、



みんなの思いが書かれたメッセージキルト

地域の環境への想いを寄せ書きしてもらっている。旅を続ける中、キルトの枚数は随分と増え、写真のキルトは、関東グループが旅をして来た、茅ヶ崎、三島、浜松の人々のメッセージで埋められていた。

別れの淋しさも印象深い思い出

知らない人と対話し、想いを伝えることもさることながら、旅先での思い出が、彼らをますます逞しくしているようだ。

「その土地の美味しいものを食べたい

いというのも、旅の目的の一つ(笑)。
私たちはマイ箸を持っていて、割り箸は貰わないことにしています。名古屋で味噌カツのお店に入ったところ、お店のおばあちゃんが、マイ箸にとっても興味を持ってくれて、聞いたことあるけれど、実際に使っている人を見たのは初めてだと、マイ箸の話題で盛り上がりました」(飯塚さん)

「富山では、自転車さやらばんのOBが、地元の大学生を集めてくれて、一緒にアピール活動を行いました。彼らは、自分たちのサークルのOBにも声



これが“マイはし”。左はオリジナルうちわ、プレゼント用。

をかけてくれて、その晩は、そのサークルのOBの方の家に泊めてもらいました。こういう出会いっていいよね、という話をして、出会いは嬉しいけれど、別れる時の淋しさも印象に残りました」(武田君)

沢山の人からの応援をうけて

旅の途中、一般市民の人から、排気ガスで汚染された道路を、自転車で旅することは、本当に良いことかと聞かれたり、他にも、自転車に乗る人のマナ

ーの問題で、自転車に対してマイナスのイメージを持っている人が多いことを感じたそう。車道と歩道、自転車道の棲み分けがきちんと整備されていない道路行政上の問題もあるが、

「一番は自転車に乗る人のマナー。旅を通じて、自分の意識も高まりました」(新宅さん)

「大阪から岐阜まで、車内に自転車を持ち込むと迷惑をかける。だから混雑する快速電車は避けて、普通電車を乗り継いで来ました。自転車は究極のエコライフ。今後、車内に自転車を置くスペースの確保など、仕組みが変われば、電車と自転車を利用したエコスタイルの旅も広がるのでは」(北君)

自転車そのものに対する意識も深まったが、旅で得た一番大きなものは、

「皆さんの応援。とても嬉しくて、だからこそ、この旅を自分にとって大事なものにしたと思います」(掛布さん)

全員が、家族のような深い絆で結ばれ、楽しい旅であるとともに、自分の責任について考えさせられる旅になったと、それぞれの横顔が語っていた。



”くつき 秋の夜長を楽しむ夕べ“大成功!!

日時／9月16日（土）13時～18時

場所／くつきの森・やまね館

テーマ／『もったいない・おかげさま・ほどほどに、が循環型社会を創る』

- 内容／①「持続可能滋賀の社会像について」＝基調講演 内藤正明氏
②座談会＝末永國紀氏、海東英和氏、中村哲氏、内藤正明氏、森建司氏
③京都小川珈琲コーヒータム（パードフレンドリーコーヒーの取り組み）
④立命館レ・コラボサークルの取り組み
⑤夕食会

主催／NPO法人・麻生里山センター

協賛／MOH通信

後援／高島市、滋賀経済同友会環境倫理研究会

協力／循環型共生社会研究所

参加／100名

料 金／3000円（コーヒー、食事つき）



虫の音が、いいぐあいにくつきの森やまね館

費を払ってきてくださいました。感謝・感激です。

〈基調講演〉

「持続可能滋賀の社会像について」

内藤氏／地球の環境悪化は、皆さんが体験するより、深刻です。次世代に今の環境水準が残せるか？研究結果では、答えはノーです。そこで、前知事の特別を受けて創ったのが、この「持続可能滋賀モデル2030」(MOH通信13号)です。石油資源に頼らず、都市を集約化し、中間技術(職人の技術)を利用した暮らしに変える必要があります。車から、自転車へ船輸送へ、交通手段

やったーやりました!!
MOH通信が企画する読者交流会が、NPO法人麻生里山センターさんのご支援で、見事に実現しました。
100名もの参加者が会

も大きく変化するでしょう。このビジョンは、新知事に引き継いでいただけのもの、と確信しています。持続可能な循環型社会は石油依存から、決別する覚悟が必要。高島市から滋賀県へ、日本へ、そして世界へと波及する高島モデルを作りましょう。



最近過激な発言が増えた、内藤先生



熱気あふれる場内

〈座談会〉



「環の郷・高島をみんなの力で」
海東市長

海東市長／高島市は中江藤樹先生ゆかりの地です。先人の文化を受け継ぎたい。そして高島市は合併して、滋賀県の中で面積はもっとも広く、人口はもっとも少ない市となりました。市民が活力を持って暮らせるには、共通の思いが必要で。今日、内藤先生のお話をお聞きして、持続可能な循環型社会は是非、ここ高島からと思いました。今日は、高島市の方向性が明確になりました。メモリアルな日です。



「政治は市民が変わるもの」
ハーン氏

エクハルト・ハーン氏／ドイツは市民が経済界と政府を動かしました。大切なキーマンは人（市民）です。滋賀県の下つぎで、た



「経済に近江の知恵を」
末永先生

くさんの市民に会えたことが嬉しい。ドイツの環境住宅は、日本の「江戸ハウス」を見本にしています。日本のすばらしい環境文化を大切にしてください（ドイツから、ドルトムント大学のエクハルト・ハーン先生が飛び入り参加）

末永先生／滋賀県には近江商人の哲学が残されています。常に薄い利益で満足し、利益は天道の恵み次第と心得ていました。取引は人の道を貫くことを基本にしていたのです。このような、暴利を得ないで、あまった利益は地域に還元する。近江商人の魂が今、必要です。

中村氏／くつぎの森は、ごらんのよう
に便利なものは、ありません。あるのは、荒れた自然です。山は人が入らなくなると、荒れてきます。山は人と共生しなければ機能しません。山が荒れると、琵琶湖の水にも影響が出ます。かといって、私たちは微力なNPOで

す。皆さんに、こうして来ていただけただけで、くつきが生きかえります。くつきが来てくれたらいい。



「家よりくつきの森にいる時間が長いです」中村氏

森氏／循環型社会を創るには、大手企業の力を借りず、中小・零細企業が経済を引っ張ることが大切です。今の経済を変えるのは、皆さんです。環境生協は、「買いた物が社会を変える」といっています。ぼくは、「革命を興すのは、消費者だ」と思っています。皆さんのライフスタイルで、社会を変えようではありませんか。



ますます、ヒートアップする森氏

〈京都小川珈琲コーヒータイム （バードフ렌ドリー（R）コーヒーの 取り組み）〉

コーヒーの収穫量確保のため、近年は森林伐採が顕著でした。そして、野生動物の生息を脅かしています。バードフレンドリー（R）とは、コーヒー生産の分野における環境保護プログラムで、スミソニアン渡り鳥センター（米国ワシントンにあるスミソニアン国立博物館内の認証機関）が中心となって進めています。熱帯の森林を守りながら木陰で、コーヒー栽培が行われています。渡り鳥にやさしいコーヒー

は、地球環境にもやさしい。一杯のコーヒーから地球環境を考える、小川珈琲のバードフレンドリー（R）“プロジェクトがスタートしました。

薫り高い、バードフレンドリー（R）の淹れ方教室とクッキーで、至福のひと時。お土産にコーヒー豆もいただきました。

コーヒーのかぐわしい香りに、うっとり



〈立命館レ・コロボサークル〉

エコはカッコイイ。これが彼らの主張です。「ゆるくて、かっこいいエコ」がコンセプト。ゴミでアートを創ったり、古着をかっこよく着こなし、畑を耕し、自給自足を体験する。

立命館大学・

琵琶湖草津キャンパス発のサークルです。当日は、紙ペンを販売。あっという間に完売でした。



元気に活動紹介する、レ・コロボメンバー



〈夕食会〉

これが、美味かった！（食べなきゃ分らない）。鯖の海苔巻き、さばのなれずし、さばそうめん、へしこ、きずし、煮しめ、ぜいたく煮、ナスの油煮、まつたけご飯、ぜんまいの白和え、船場汁、なめこ汁、ぼた餅などなど。きれいに完食。ご馳走様でした。くろへえさん、ありがとう。

「おいしい！」舌鼓を打って、会話にも花が咲く





音がリアルでクリアでした。アンコールの風が・・・

〈ジャズライブ〉

麻生里山センター主催。

会場は70名で満席。虫の音と夜のジャズ。くつきにジャズはひびいたり。

「ひふみバンド」はおまわりさんの深川さんがサククス、ピアノは保育士の上田さん、郵便局員の徳本さんがバス…と地元がほころジャズバンドです。

「即興はんど」オルガンの小野みどりさんは、司会に加藤みゆきさん（MOH

通信漫画執筆）の姉様。トランペットの浜田さんは今津のペンション・シープのオーナー（MOH通信紹介）、ドラマの堺さんは大阪から駆けつけてくれました。「夜道のくつきは怖かった」そうです。ギターは能勢さん。

プロミュージシャンの演奏が、生で聴けた。幸せ。

〈鹿〉

プログラムがすべて終わった、真っ暗な帰り道。やっぱり、出ました！鹿です。車が通過するのを、待っていた、2頭の鹿に遭遇。なぜか、うれしい。でも、獣害といわれている。複雑。

〈びわ湖放送にて9月23日放映〉

滋賀経済NOW7回のおかげで、紹介していただきました。エピソード。出演者の一言がすごく効果的。今後の示唆もしめされています。

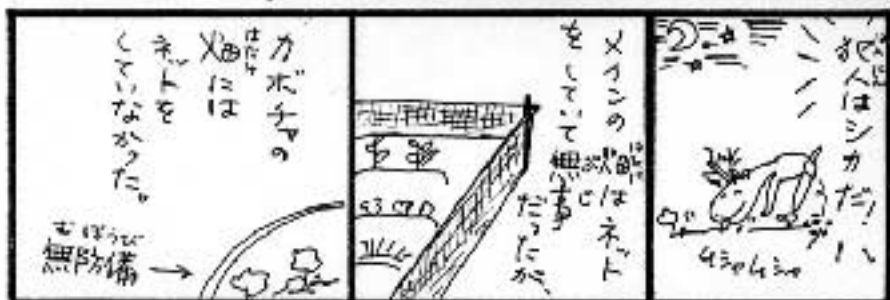
〈あなたの町でもいかがですか？〉

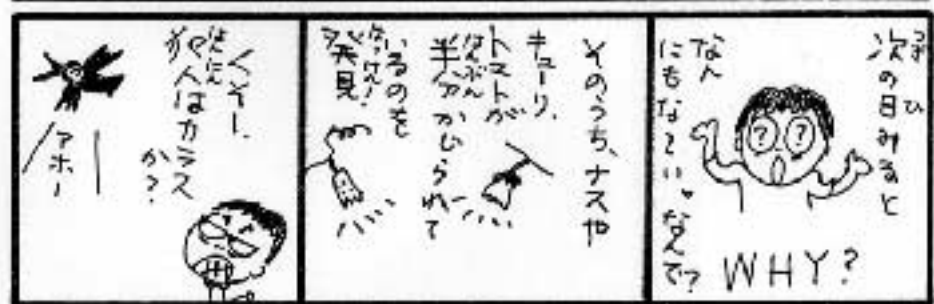
「町づくりを考えたい」と思っているグループがあれば、協力します。連絡ください。

野菜泥棒はだれだの巻

作 江 洋









●オノミニキ (本名加藤みゆき) 1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。
 1997年に朽木村(現高島市)に移住。朽木の自然、行事、人間などを冊の本にまとめて出版。現在は2人の子どもを子育て中。

藤樹先生に学ぶ

その3

井上 昌幸



平成十八年八月二十六、二十七日の二日間、高島市で「中江藤樹・心のセミナー」が開催されましたので参加しましたが、久しぶりに藤樹書院を訪れることが出来ました。

書院室内の壁に「致良知」と「五事を正す」が掲げられていたので、今回は藤樹先生と中国古典の「大学」について触れてみたいと思います。このような内容につきましては多くの書物や文献が出版されていますが、それらを参考にしてあまり専門的にならずにできるだけわかりやすく説明していきます。

藤樹先生と「大学」との出会いには先生が十一才の時、
「藤樹先生行状」には「十一才の時に始めて大学と言う書物を読んだ。その中に『上は天子から下は一般の庶民に至るまで、すべての人々が身を修める、つまり徳身に付けることが基本である』と書かれているのを読んで大変感激して、一般の庶民でも学ぶことによって聖人に至れることを理解した」と書かれています。

「藤樹先生年譜」には、「大洲時代の十六才の時、『四書大全』（大学・中庸・論語・孟子）を入手して『大学』を深夜に二十枚読むがわからない所があればいつまでも忘れられず、寝ている間に何かをつかむことが多かった。このようにして『大学』を約百回繰り返し読んで始めて理解が出来て、その後論語や孟子を読むとその内容

がスラスラと理解出来た」と書かれています。

藤樹先生は朱子がまとめた「四書大全」などを使って学んだため、大学に書かれている内容と自分が理解しようとしている内容とが一致しなく、納得のいく指導が出来なかった。前回説明したように熊澤蕃山が入門を要請した時に最初受け入れなかったのはこのような理由があったようであります。

「藤樹先生年譜」には、先生が三十七才の時に、「この年に始めて『陽明全書』を入手することが出来た。これを読んで大学の内容を心の底から理解することが多く大変感銘を受けた。お陰で学問が更に深く進んでいく」と書かれています。

この時の心境が「池田子に与える」と云う手紙の中に書かれていますので引用します。(読み易くしています)

「勉学の方はどのようにすすんでいますか、きつとすすんでいることとお察しします。私はこれまで朱子学を信じて長い間工夫して参りましたが、思うように深い理解に至らなくて、学問の進め方に疑問を持ち、悩んでいました。

天道の恵みで『陽明全集』と言われる本を入手して、熟読しましたら今まで疑問に思っていたことがすっかり理解出来て憤りがなくなり、『徳』の本当の意味が理解できたように思えて、この一生の喜びを言葉では言い尽く

せません。

もしこの本の助けが無かったならば、私の一生をむなしくしていたのではないかと思うと本当に有り難いことだと思っっています。お会いして是非お話をしたいと思えます。百年も前に王陽明と云う先覚者が世に出られて、朱子学の問題点を指摘され孔子さまの学を明らかにして、大学の古本を信じて、致知の知を良知と解釈されました。この内容を理解することによって悟りがひらかれたように思います。そのことについて『大学古本』を主としてまとめていきますので出来次第に貴殿にお送りしたいと思っっています」

ここで「大学古本」と云う言葉が出てきましたので説明します。まず大学の三綱領とは次の三つのことを云います。

大学の道は

明德を明らかにするに在り

(生まれつき持っているすばらしい徳を發揮すること)

民に親しむに在り(朱子編纂の「大学」では、民を新たにするに在り)

(自分の修養ができたなら、それを人にも及ぼすこと)

至善に止するに在り

(右の二綱領に達したらその状態をいつも維持するよ
うに努めること)

明德とは聖人から庶民に至るまで本来持っている善の心のことではありますが、太陽に雲がかかると暗くなるように、人間が赤子から大人へと成長するに伴い、良くない智慧がついてきて善の心を曇らせませす。その良くない智慧を振り払って本来持っている善の心を明らかにすることが大切なのであります。

藤樹先生はこの「明德を明らかにするに在り」の意味は理解出来たのですが、それをどのように工夫すれば良いのか長い間悩まれたのです。

次に大学の八条目について説明します。

格物——致知——誠意——正心——修身——齐家——治国——平天下

この「格物・致知」の解釈が朱子と王陽明では違うのですが、ここでは藤樹先生がどのように学ばれたかを説明していきます。

まず 格物「物を格す、この「物」を藤樹先生は事と解釈されました。事は五事のこと、視・聴・言・貌・思、即ち視ること、聴く事、言う事、それから身体全体の様子、それと心に思う事、この五つを云います。「格す」と云うのはこの視・聴・言・貌・思の邪正をただすことです。

最初に書きました「五事を正す」と云うのは次の通りです。

視：優しいまなざしでものごとくを見つめる

聴：耳を傾けて人の話を聴く

言：思いやりのある言葉で話しかける

貌：なごやかな顔つきをする

思：まごころこめて相手のことを思う

藤樹先生はこの「五事を正す」と云うことを大切にされ、人々に分かり易く教えられたのではないかと思えます。

次に誠意——意を誠にす、この「意」を藤樹先生は意念と云われて、物がほしい、名譽がほしいなどの私の欲であると解釈されて、「誠にす」とはその意念に打ち克ち、融かさなければならぬ、と云う意味に理解されました。

論語・子罕第九に「子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし。」と書かれており、宇野哲人著「論語」の解釈を引用しますと、「意」というと自分の考え、我々は誰でも意志を持っており、この意なし、というのは個人的な私意の意味です。どうも自分一個の意志がありませんと、自然それにこだわる。是非やりたい。どこまでも固くそれをやりたい。そいついに我意を通す。孔子はそうではなかった。はじめから私意私欲の念がないから、是非それをしてはならないという気持はおありにならないし、頑固にそれをやり通さなくてはならないというお気持もなく、いわゆる我欲というものがなかった。この意・必・固・我の四つは、意があれば当然、是非やろうということになる。是非やろうと思えば固くどつて

動かない。そして次に我意を通すというようにこれはずつと連絡しているようです。それが孔子はなかったということ、終始孔子の公平無私な、後世の言葉で申しますなら、いわゆる天理に従っておられたものようです。」と書かれています。このように我意我欲に打ち克つことが大切であります。

次に致知——王陽明は「事上磨錬」、「知行合一」と行動の中で体得したため、「知を致す」と読み、この「知」が「良知」であることを会得して、そしてこの「良知」を「人間が持っている本来完全な心」と解釈し、「知を致す」とは「良知自らが自己を発揮することである」と弟子を指導しています。

藤樹先生は「陽明全書」を読んで、「知」が「良知」であることを学ばれて今までの疑問が氷解したのです。そして「致知」を「良知に致る」と解釈されました。それは格物（五事を正すこと）、誠意（我欲に打ち克つこと）を実践することにより、「良知に致る」のであると解釈されたのです。ここに「致知」を王陽明とは少し違った解釈にされたため「藤樹学」と云われるようになりました。

このようにして、「良知」と「明德」は同じ内容であり、「良知に致る」とは「明德を明らかにする」ことであると会得されたのです。

このようにして、大学の三綱領と八条目の関係が明らかになり、そのことを熊澤蕃山や他の弟子たちに指導されたのではないかと推測します。

藤樹先生は十一才から「大学」を学び、三十七才の時に「大学」についての疑問を解くことが出来たのですが、実に二十六年間真摯に学び続けられたのであります。

現代の我々は多くの良書を読む機会がありますが、どこまで熟読できているか大いに反省する必要があります。はないかと思えます。

井上昌幸

●いのうえ まさゆき 1940年1月1日生まれ。2000年日本電気硝子(株)定年退職。現在、滋賀県農業種交流連合会会長、STEP21(滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合)専務理事、滋賀県技術アドバイザー、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人
(資格)ISO14000&9000審査員補

<MOH-ECOTOURISM-4>

400万年の湖から

檀上 俊雄



このタイトルは、この6月からスタートした私の旅家ブログの題名だ。旅家は、インターネットポータルサイト^{www}の旅行記事を配信するイービストレードが、今年になってオープンしたサイトの名称であり、地域活性化の特集記事や、各地の雑誌の紹介、ブログ情報に特徴がある。現在公開されている高島市の記事や観光資源情報作りはとて

もやりのある仕事であった。旅家地域活性化プロジェクトユーサーはブログとして

の役割を担い、取材裏話や日常的な旅にかかわる取り組みをブログで披露するという、新しい取り組みだ。400万年の湖とは、もちろん琵琶湖を指すが、400万年前にはそればかりか日本列島の原形というか輪郭ができた時代でもある。伊賀地方に生ま

れて、次第に北へ移っていったという琵琶湖の生い立ちも、広い視点に立っていえば伊勢湾近くまで達していた古瀬戸内海というものの一部が独立、移動したものである。

また湖西、湖北の山は、太平洋側と日本海側を区切る中央分水嶺にあたり、その山並は東へ奥美濃・奥越から飛驒、北アルプスと続き、西へは芦生美山から中国山地、大山へ連なる。南には温暖な紀伊半島があつて、北は対馬暖流の流れる日本海が広がる。琵琶湖の東西南北には、亜熱帯の多雨地帯から温帯の豪雪地帯、亜寒帯気候の山上に至るまで多彩な自然があり、アルプス3000メートルの植物の垂直分布がある。

琵琶湖とその周辺地域は、まさに日本列島の縮図といふことができる。

こうした魅力的な地域の写真を撮り、雑誌記事を書き、ガイドブックや写真集などの本を作り、インターネットも活用してひたすら紹介に努める。これとあわせて人を現地へ案内もする。ひとりでも多くの人と感動を共にし、だれもが知ることができれば、とささや

かながら願ってやまない。

エコツーリズムの気運が社会全体に高まれば、自然環境の保全への道のは確かなものとなるだろう。環境の時代では、自然への負荷を低減し、持続可能な暮らしが求められる。生態系と同じように水を中心にした自然の中で、過疎過密の是正や、地域づくりの再構築をすることが不可欠となるだろう。川の流域の水収支の中で、人間の生産や生活の活動をコントロールする考え方が強く求められるからだ。

琵琶湖では、エコツーリズムという言葉が普及する前から、湖の自然環境保全という流れの中に、湖上、湖畔、里山においてエコツアー的な取り組みがあった。その一方で、水源地带においては概念的な捉え方の域を出ず、水源地带の実情は一部の林業家や登山者のみ知る状態であった。

こうしたなかで雑誌『湖国と文化』に「水源の森を訪ねて」の連載をさせてもらったことは、私にとっては望外の喜びであった。琵琶湖の水の生まれる場所を数多く見てみたいのはもちろんだが、生態系の維持されているほん

ものの自然を知るにふさわしい場所であり、水源の森へ通うなかで自然の恵みを最大限に享受し、自然の中でたくましく生きる術を得ることができるとあって、興味は尽きない。


ともかく手軽にこうした魅力的で貴重な地域を巡ることができると、とても素晴らしいことだ。旅の効用であるところの世間を知ることとは、義理人情や社会の仕組みを知るだけではなく、大自然の作る雄大な風景に接することも含む。こうした場所では自然災害が繰り返されることが多く、風景観賞をしながらその歴史と復旧方法を学ぶことになる。

エコツアーの重要な役割として期待されているのが、危機管理能力を向上させることだが、これは自然や歴史と向かい合うなかで、危機の実態、仕組み、地理などを知ることから始まる。さらに危機管理が必要となるのが、野外での生活力。この有効なトレーニング方法は楽しく継続的に自然に親しむことであり、自然と常に向かい合うライフスタイルを確立しておくことに尽きるだろう。こう考えると、家から自

然の真只中へ必要最小限の荷物を背負って行う登山など、自然を知ること自然の中で生活力を養う究極のスポーツのひとつといえるかもしれない。

水源の森や中央分水嶺のエコツアーは、方法的には登山そのものであり、困難ではあるが、もっと多くの人がこれに取り組む必要があると思う。私たちが住む流域の水を中心にした生態系や、地理や歴史を知ることが危機管理上でも欠かすことはできない。さらに自然の恵みを最大限に享受してこそ成り立つ、健やかで持続可能な口ハスの世界は、生態系が維持されているほんとうの自然のみにだけ存在することもわかってくる。

400万年の湖は、多くのことを教えてくれる。知れば知るだけ、自然とともにある有意義で快適な生活を送ることができると。その醍醐味やノウハウを、エコツーリズムという視点から発信する作業は、環境の時代が深化するなかでも重要だ。集水域に暮らす人の多くが発信したり情報交換するようになれば、その時には自然環境も大きく改善されることだろう。



写真は、湖西トレイル黒河峠あたりのブナ林と水坂峠近くの廃道の峠。

400万年の湖は北へ移動したことで、雪深い中央分水嶺に接することとなった。

ブナ林の中でひと時を過ごす。人間の誇るべき五感が稼働して、里山とは明らかに違う、豊かで秩序だった森の営みを感じ取ることだろう。湖を潤す水の生まれる瞬間を見とどけ、こうした森に生きた人たちがいたことを思う。

中央分水嶺を横断する峠道にしばしば出合う。今は廃道となった峠も多い。日本海側と太平洋側の長い交流の歴史を物語る貴重な遺産であり、北前船からの多くの荷が敦賀、美方、小浜などから、こうした峠道を越えて湖畔の港へ運ばれたのだ。そればかりか湖西の山村の生命線として、塩や生活物資を運ぶひとすじの道でもあった。

こうした人と自然のかかわりや、共生の歴史を知るためにも、私たちは現地へ足を運ばなければならぬ。

檀上俊雄

● たんじょう としお 1951年広島
県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理
学科卒。2001年株式会社昭文社旅行
書編集部退社。山と自然研究会青山舎代
表。日本旅のペンクラブ会員、湖西の山ネ
ット事務局長
著書／「比良山・湖西の山」山と溪谷社（
共著）

アウグスブルグから 〈ドイツだより—3〉

原 修子



霧とともに、ドイツの秋はやって来る。夏のある朝、目覚めて外を見ると霧の世界。秋の訪れだ。日射時間が短くなってゆく。10月末に夏時間から冬時間へ変わり、日暮れが1時間早くなる。冬の長夜、人々は過ぎ去った一年に思いを馳せる。

そのような一刻、多くの人々が今年一番の出来事として、しかも素晴らしき思い出としてあげるのがサッカーワールドカップであろう。サッカーファンだけではなく、普段は「サッカーって何？」という人も巻き込んだので、ドイツ国民のお祭りとなったイヴェント。

ドイツ人が第二次世界大戦後初めて、ドイツ人であることに誇りを持って、示すことが出来た日々。天気も素晴らしかった！雨の多い寒い5月が過ぎ、6月9日の開幕と共に夏の訪れ。気温観測史上始めて以来の暑い7月となった。ただ、ワールドカップが終了すると共に、スーパーサマーのお天気も去り、南ドイツでは8月は40年来の冷夏となった。それだけの理由でも、ワールドカップを懐かしく思う人もいるであろう。

●ペットボトルの代引システム●

5月1日にドイツでは一般廃棄物処理に関する新しい法律が施行された。その中には、ペットボトルを使用した飲料品容器に適応されるものもあった。ペットボトルや缶などの容器、プラスチック製の包装材は、1994年に施行された廃棄物循環法を実行するため設立されたDSD(Dual System Deutschland GmbH)社による回収システムで回収される。同社のグリーンポイントが付く。

今までは、専用のコンテナ、或はコ

三箱に捨てていた。DSD社はそれらの容器を回収し、二次資源として再利用するためにリサイクルングに回すという責任を負っている。そのための費用は品物代に含まれている。5月1日から適用されている法律は、販売業者にペットボトルの引き取りを義務づけたものである。例えば、自分の店で売ったものではなくても、同じ品物を扱っている限り、店側は引き取りを義務づけられている。購入するときに支払ったペットボトル代が、その時返却される。これはスーパーマーケット等の大型店舗のみならず、駅の売店や街角の小売店舗、観光地の売店、或はガソリンスタンドでも同じである。

ガラス瓶類に関しては、以前から瓶代システムがあり、ジュース、ミネラルウォーター、ビール等瓶代を取るものと、ジャム類やワイン、アルコールのパーセントの高いウイスキーの瓶のように取らないものとに区別されている。瓶代はペットボトルと同じで、瓶を持って行けば返却される。その他のガラス容器類は、専用のコンテナに捨てることになる。透明ガラス用、緑色

ガラス用、そして茶色ガラス用と、3種類用意されている。

これらの返却作業は人手を使って行われていた。ペットボトル回収、代金返却の実施に合わせて、自動化のために瓶類返却取扱機を設置するスーパーマーケットも増えて来た。機械の返却口に瓶を入れると、瓶のラベルに印刷されているバーコードで受付けるものが、拒否するものが認識される。受け付ける種類のものであると、グリーンのランプが点灯し、機械の中へと送られ、拒否するものであると赤いランプが点灯。瓶は入り口へと押し出される。全ての瓶を自動返却取扱機にかけた後、返却金額のボタンを押すと、代金が印刷されたレシートが出て来る。それをキャッシュャーで提示すると、その金額が代金から差し引かれる。もし何も購入していないときは、現金で返却される。

●景観にも寄与した●

さて、始めに書いたように今年の7月は、本当に暑かった。清涼飲料水の売り上げもべつと伸びた。ワールドカップ

を観戦するために訪れた人の数も多かった。そして、サッカー場へのペットボトルの持ち込みが禁止されていたので、全て入り口で回収された。また外国からの観戦客は、瓶・ペットボトル代返却システムを知らず、空になったボトル、瓶を街角のゴミ箱に捨てた人も多かった。そしてそれらを集めた人もいた。小遣い稼ぎのためであったかも知れないが、街の景観のために役立つたのは確かである。

瓶・ボトル回収で街の美化に貢献しながら、小遣いの収入も有った人。彼らにとって今年の夏は本当に良い夏であったであろう。ワールドカップよ、もう一度(?)かも知れない。ことに寒い冬を目前にしているのでは。

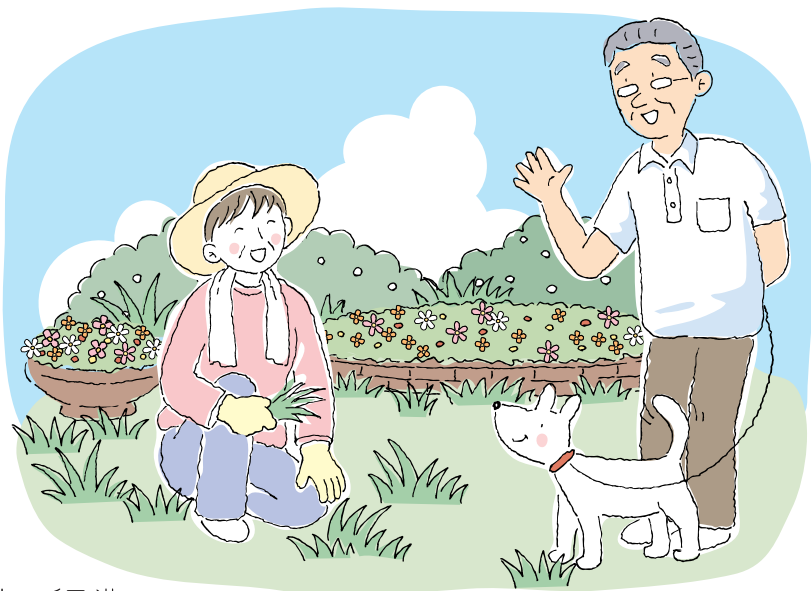


●(は)ろ(し)ゆ(こ) 徳島市出身。1997年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。

翻訳。

連鎖

今関 信子



イラスト：千田 満

今年、自治会の役員が当たっている。わたしたちの自治会では、一年交代で役員を回しているのだ。六十戸ほどの小さな自治会だから、自治会という名にふさわしい自治活動ができると思ったり、とんでもなかった。

これでは、行政の手足ではないか。配布物のなんと多いことが。行政がお膳立てした集会への動員も、しかり。こんなやり方で、自分たちの暮らしを自分たちで築く「市民」は、生まれていくのだろうか。

そんな思いに寂然としない日々を送っていたが、怒っていても始まらないと、できることから動くことにした。そんなある日、自治会に隣接して道路ができて、公園が作り替えられた。以前に比べ開放的になり緑も多くなったから、公園に足を運ぶチャンスも増えた。

気になるのは、雑草である。さつきの間に、桜の根本に、寄せて植えられた柘植の中に、元気に伸びてくる。初めは目の敵にしてむしっていたが、雑草も秩序があるらしいと気がついた。春に勢いよく伸びる草、夏にむしって

もむしっても生え出てくる草、秋にバッタたちに食われながら育つ草、それぞれの季節に草たちは盛りの時を持っていた。いつとき己の勝利を歌うかのように、あっちにこっちに同種の草が生え出るのだが、しばらくすると自然に消え、次の出番がきた草が、我が生育の時を歌い出す。

それにしても、よく生える。雑草というのは、人間が勝手にそう区分けしているだけのことだから、雑草は伸びてきて当たり前なことではあるのだが。

そうは言っても、花壇の花より雑草が元氣というのは、都市的景観を創ろうと意図して設計された場所ともなれば、気にしないわけにはいかない。朝、二十分だけ、雑草を抜くことにした。

一ヶ月目は、誰も何とも言わなかった。二ヶ月目には、「おはようございます」と声をかけて通る人がでてきた。夏の太陽が照りつけるよつにならと、「く苦労様です」と言ってくれる人が、くーんと増えた。話すチャンスがなかった自治会の人とも、立ち話をするようになった。

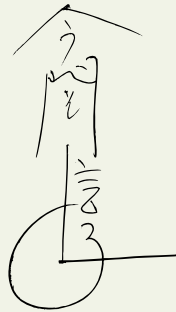
ある日、自治会のおとしよりが近づいてきた。朝に晩に犬の散歩をしている方だった。「十本ひきますんや」と言った。唐突だった。私は、とっさに何のことが分からなかった。「散歩のついでに、だれも引かない緑地の草、毎日引ますんや。十本でも違いますで」と、さりげなく続けた。草引きという行為が、わたしたちをつなげてくれたのだ。最近、ウォーキングの途中に草をつまんでいく人を見かける。引き抜かれた草が干してあるのを見る時もある。誰かが草を抜いてくれているのだろつ。

思いが伝わっていく。いや、同じ思いを抱いていた人たちが、顔を見せ合いためたのだ。

なんだが楽しい。



● せんた みつる 1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオオアヒーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロコマークやパース・キャラクタードesign等グラフィック全般、広告エディトリアルを中心に活動中。



● いませきのこ 1942年東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。

〈主な著書〉「小犬の裁判ははじめます」1987 童心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995 国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で『寺小屋』つくりに」2003 PHP 研究所 など多数

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。
7月～9月の講演をダイジェスト版でお知らせします。



比叡山仏教文化講座にて森建司

米原市環境集会所「環境美化推進員等研修会」

- 日時：2006.7.7
- 主催者：米原市・環境保全課
- テーマ：「環境を良くするキーワード ～もったいない・おかげさま・ほどほどに～」
- 場所：ルッチプラザ（米原市民交流プラザ）

●参加者：150名

- 演者：辻村琴美
- 内容：1.なぜ今MOH通信なのか 2.もったいないブームが来た 3.おかげさま・ほどほどに、で買物を減らそう 4.環境に対する姿勢は人材育成につながる 5.地域外交流で学ぶ思いやり
- 織細なハート 7.嫁が学んだ3つのこと

- 日時：2006.7.12
- 主催者：福井信用金庫・毛矢みりおん会
- テーマ：「近江商人のあれこれ話」

場所：ふくしんコミュニティセンター

- 参加者：30名
- 演者：森建司
- 内容：1.現代社会の認識 2.自由主義経済社会の基本原理 3.今われわれの為すべきこと 4.近江承認の家訓の教えるもの 5.自由主義経済から環境倫理主義経済へ

〈調査〉

- 日時：2006.7.18
- 訪問者：滋賀大学 弘中史子助教
- 対応者：森建司、辻村琴美
- 内容：MOHについて

- 日時：2006.7.26
- 主催者：新江州（株）・ISO勉強会
- テーマ：「MOH通信の役割」
- 場所：新江州（株）会議室
- 参加者：12名
- 演者：辻村琴美

- 内容：1.エネルギーが70年後に枯渇する 2.国の政策 3.持続可能性 4.企業の役割 5.MOHの役割

- 日時：2006.7.29
- 比叡山仏教文化講座

主催者：比叡山延暦寺・京都新聞社

- テーマ：「もったいない」
- 場所：比叡山延暦寺会館
- 参加者：250名
- 演者：森建司
- 内容：1.自由主義経済の基本原理 2.現代社会の認識 3.いまわれわれの為すべきこと 4.近江商人の家訓の教えるもの 5.自由主義経済から環境倫理主義経済へ

- 日時：2006.8.2
- 主催者：笠松町商工会・笠松商店ブック作成委員会
- テーマ：「危機意識が町を救う」

- 場所：笠松町商工会館
- 参加者：18名
- 演者：辻村琴美
- 内容：1.エネルギーが70年後に枯渇する 2.国の政策 3.持続可能性 4.企業の役割 5.町の役割 6.実行のために 7.京都新聞社説凡語より

細江町・町づくり講演会

- 日時：2006.8.5
- 主催者：細江町
- テーマ：「MOH運動」もった

いない(M)・おかげさま(O)・ほどほど(H)

- 場所：細江町
- 参加者：80名
- 演者：森建司
- 内容：1.もったいない 2.おかげさま 3.ほどほどに 4.今求められる倫理とは 5.MOH運動にご協力を

平成18年度「環境塾」講座

- 日時：2006.8.12
- 主催者：米原市
- テーマ：「もったいない(M)・おかげさま(O)・ほどほど(H)」
- 場所：近江公民館
- 参加者：15名
- 演者：森建司
- 内容：1.もったいない 2.おかげさま 3.ほどほどに 4.今求められる倫理とは 5.MOH運動にご協力を

平成18年度「環境塾」講座

- 日時：2006.8.12
- 主催者：米原市
- テーマ：「危機意識が町を救う」
- 場所：近江公民館
- 参加者：15名
- 演者：辻村琴美

- 内容：1.エネルギーが70年後に枯渇する 2.国の政策 3.持続可能性 4.企業の役割 5.町の役割 6.実行のために 7.京都新聞社説凡語より

第50回PET物流包装懇話会

- 日時：2006.8.25
- 主催者：「
- テーマ：「もったいない、おかげさま、ほどほどに」
- 場所：新江州(株)会議室
- 参加者：30名
- 演者：森建司
- 内容：1.包装資材業者として 2.エコ村運動 3.環境倫理啓発運動



PET物流包装懇話会にて

「MOH通信」執筆者懇談会5

- 日時：2006.9.7
- 主催者：MOH通信
- テーマ：「MOH通信と活動」
- 場所：キャンパスプラザ京都
- 参加者：18名
- 内容：1.MOH通信14号報告と15号予定 2.MOH通信3周年記念出版について 3.秋の夜長を楽しむタペ打合せ

秋の夜長を楽しむタペ座談会

- 日時：2006.9.16
- 主催者：NPO法人麻生里山センター
- テーマ：「もったいない、おかげさま、ほどほどに、が持続可能な社会を創る」
- 場所：高島市朽木・森林公園「くつきの森」やまね館
- 参加者：100名
- 演者：同志社大学・末永國紀教授、高島市・海東英和市長、麻生里山センター・小林二郎理事、琵琶湖環境化学研究センター・内藤正明所長、森建司(コーディネーター)

- 内容：1.持続可能滋賀の社会像 2.住民の意識改革 3.新しい県政に期待すること 4.質疑応答

第4回滋賀県派遣社会教育主事ブロック研修

- 日時：2006.9.21
- 主催者：滋賀県町村教育長会
- テーマ：「危機意識が地域を救う」
- 場所：新江州(株)会議室
- 参加者：8名
- 演者：辻村琴美

- 内容：1.エネルギーが70年後に枯渇する 2.循環型持続可能性 3.国の政策 4.地域で生きる 5.企業の役割 6.MOHの役割 7.町の役割 8.実行のために 9.京都新聞社説凡語より

「長浜バイオ大学インターン生」受入

- 日時：2006.9.29
- テーマ：「危機意識が地域を救う」
- 参加者：1名
- 演者：辻村琴美
- 内容：1.エネルギーが70年後に枯渇する 2.循環型持続可能性 3.国の政策 4.地域で生きる 5.企業の役割 6.MOHの役割 7.町の役割 8.実行のために 9.京都新聞社説凡語より

きのこ狩り

三山 元暎



さし絵：中川 善雄

日曜日、久しぶりに近くの雑木林を歩いた。気の早いウルシは何枚かの黄葉を忍ばせていたが、湖北の山野がきんしゅう錦繡を織るのは今月の中頃だろうか。

それでも、風も吹かないのに二つ、二つと落葉が舞い降りる。木立の中を歩くのは、気持ちがいいものだ。積もり積もった落葉のクッションが何とも心地よい気分にしてくれる。

半日は行方不明のきのこ採り

山崎 佳子

秋の楽しみは、何といってもきのこ狩り。きのこは自然が生み育んでくれた私たちへの贈りものだ。植生や地形、気候に非常に敏感で、条件によって頭をもたげるきのこの種類が異なる。しかも、一方は美味、他方は猛毒ということがざらにある。図鑑で知っていても、実際に目にするのは初めてのきのこや思いがけないきのこを手にしたときの喜びは、躍り上がる心境だ。きのこ狩りの楽しさは尽きない。

私の好きなきのこは、ヤマドリタケやヌメリイグチなど傘の裏がスポンジ状のイグチ類である。マツタケのような高級きのこではないが、鍋物や酢の物にするとうまに美味し。

この種のきのこは、ぬめり具合から遠くからでも良く見えるし、同じ仲間にはほとんど毒のものがなく、安全なグループだといわれている。だが、油断は禁物、毒のものもある。いちご誤食して下痢の症状になった。それでも、きのこには懲りない魅力があり、とりにこになってしまつ。

今日の収穫は、鮮やかなセラチン様のぬめりがあるムラサキアブラシメジモトキ。夕餉にお吸い物にいただいた。

きのご食心この世の不思議思ひつゝ

青柳 志解樹

三山元暁

●みやま もとあき 1940年滋賀県坂田郡山東町(現米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1999年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

本の紹介

最近入手した、
気になる本を
ご紹介します。

『カネボウ凋落「日本的経営」の終焉』



- 著者／山川猛
- 発行所／文理閣
- 価格／1800円＋税

●内容／経営に行き詰まり再生支援機構の支援を受けた名門・カネボウをモデルケースに、組織の硬直化や失敗を泥沼化を招く「日本型経営」を解体する。構造の支援を受けた名門・カネボウをモデルケースに、組織の硬直化や失敗を泥沼化を招く「日本型経営」を解体する。

『環境都市第編：わがまちは、油田!!』

●著者／古村元男＋鳥取環境大学循環型まちづくり研究会

- 発行所／
- 価格／5000円
- 内容／石油が、ぶ飲み恐竜



型巨大都市から、太陽と土の恵みに生きる節足動物(ミミズ)型社会へとソフトするため、7つの原則と10のプロگرامをカラーで分かりやすく解説する。

『Eco-sound social systems 循環と共生 vol.2 No.1 通巻6号』
「滋賀県をモデルに持続可能な社会のビジョンを描く!」



●監修／内藤正明
●発行所／NPO法人K-ESS 循環共生社会システム研究所

●価格／10000円＋税
●内容／循環共生型社会を概念的・具体的に考へるNPO法人、K-ESSの年次報告書。K-ESS設立5周年記念行事として2005年9月に滋賀県を舞台に開かれたシンポジウムを記録。

三世代の共感が 共生のコツ

じじむらじじみ

滋賀県立大学地域再生学特論(2006年10月14日講義棟A)で滋賀県知事・嘉田由紀子さんによる「地元学による地域再生―制御から共感へ―」の講義が開催された。これは「近江環人地域再生学座・公開特別講座」の第1回目。「コミュニティ・アーキテクト」を育成するために開設された、講義を一般公開したもの。200名の参加で会場は満員。コミュニティ・アーキテクトは滋賀県立大学が始めて導入する称号授与のための特設講義。卒業生は行政・企業・地域・NPOの立場で地域再生のリーダーとして活動する。第1期生は13人。嘉田知事は、びわ湖博物館の地元学調査を紹介しながら、「制御された生活環境の危険性」と、「共感のある生活

環境が共生をつくり、危機を回避する」ことを語られた。

講義の中で野洲川の氾濫を紹介された。かつて、野洲川は何回か切れていた。被害も出ていた。野洲の人々はお墓にある背の高い墓標(南無阿弥陀仏と彫られている)が水につかると「南無阿弥陀仏になるから、避難する」術を心得ていた。助け合って避難し、復興は親戚・近隣地域が協力した。野洲川の改修は完成した。人々は安心して、川の怖さを伝えることはなくなった。川の管理は住民から、行政に託され、住民は川を忘れる。

川は、見るものになった。かつてのように川で遊び、水を飲み、生活に使い、魚を取って食卓を賑わすことはなくなつた。これが、私たちとの共生を阻み、危機感を薄れさせる。

私の記憶に「ひげのおじいちゃん」がいる。辻村保次郎18年前に亡くなった(享年89歳)。私は辻村家に嫁ぎ、2児を授かった。娘が1歳のころ、ひげのおじいちゃんは、寝たきりになった。家族で身の回りの世話をする(多くは

母に頼つたが…)。私は、そのころ大阪府吹田市で新婚生活、年に数回帰郷していた。そんな折、おじいちゃんの隣の部屋で寝ていた。「おおい！川が切れたぞおお！水が来るぞおお！逃げろおお」と、声がする。不審に思い、ふすまを開けると、おじいちゃんの寝言だった。

翌朝、母に聞くと「野洲川が切れたことがあつたんや。おじいちゃんは、その夢を見るらしい。よくうなされる。」それを聴いて、大阪生まれの私は、野洲川の危険を知った。そのことが、息子と娘に伝わってるだろうか？

私は、「法事」という習慣が、世代間の交流と共感に最適の場ではないかと思う。一族の年齢の高い人が一同に集まり、昔話に花を咲かせる。若い家族は接待をしながら、あいずちを打つ。若いものが聴く耳を持ち、年寄りに学ぶ姿勢を持つことが大切だ。

家族の会話と、一族と近所の結びつきを、もう一度取り戻す。これが共生と共感の基礎になる。

読者の声

読者の方から、深い内容のお手紙をいただきました。
一部をご紹介します

●花火の仕事に就き、この世界では、駆け出しの新参者です。何もできないのが現状ですが、「永続可能な社会」に対し、花火からのアプローチができないか模索しています。

花火大会は、地域のかたがたの連帯があつてこそ成立します。自治会や消防団、青年会や婦人会、そして、多くのボランティアの方々の集結が必要だからです。ですから、花火大会というイベントを実施、運営することで、弱体化傾向にある青年会や自治会等の組織活性化の「動機づけ」や、その一助になりやしないかと思索しているところです。これらの組織は、現在、心筋梗塞寸前の循環型社会の血管、動脈的な存在だと考えるからです。

木下 浩司

●版型は小さくなっても、中身はいつもながら充実して、頼もしい雑誌です。

斉藤喬さんと会長との対談も、

川姐さまのエッセイも、リックの原稿も、辻村さんの狙いにびたりとはまっているとおもいました。滋賀県もまた「もったいない!」とともに、大きく変わろうとしていますね。

どうぞ、今後も気合いいれて行ってください。

西城鉄男

●ご主人の素敵なお写真に助けていただきました。どうぞよろしくお伝え下さいませ。

びわ湖放送株報道制作部

笹山千怜

●「おかげさま」「ほげほげ」を忘れないようにします。8月8日13時

……『湖国と文化』中井三雄

●MOH通信13号、すごいボリュームですね、力作ですね!

松崎和弘

●『MOH通信13号』いただきました。濃密な内容でゆっくり拝読させていただきました。

大道良夫

《次号予告》

2007年2月発行予定

■特集

<危機意識～われわれが今、なすべきこと～>

【対談】

●延暦寺学問所所長・小林隆彰師(宗教の果たす役割)+森代表

●環境生協・藤井絢子理事長(市民の視点でエネルギーを考える)+森代表

【取材】

●松下電器産業(廃食油でトラック輸送)

●ねや(csrと食=おにぎり保育園、たねや農場)

●京都・賀茂湯(家族で支える銭湯)

【新寄稿】

●高月紘(日本語で知る環境力レンダー)

編集後記

わたし、女子大生になりました。滋賀県立大学の近江環人地域再生学座で「コミュニテイ・アーキテクト」になるため、1年間学びます。同期生は13人(県立大学の院生7人。社会人・県職員・行政職員など6人)。社会人は10人応募中の6人合格でした(ちなみに私は年長)。皆さんに追いつけるようがんばって勉強します。成果はMOH通信で。

.....ことみ

《M・O・H通信》購読受付中!

あなたも「M・O・H通信」を購読しませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

電話番号、fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電

《M・O・H通信》購読申込書

フリガナ		年齢	希望口数
お名前			1口=3,000円
住 所	〒		
電 話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のごことに使用または転用はいたしません。

キトリ線

M・O・H通信 Vol.14(通巻15号) 2006年11月10日発行

●編集・発行/新江州(株)
循環型社会システム研究所
M・O・H通信事務局
代 表 森 建司
編 集 長 つじむら ことみ
編集協力 稲垣 重雄
村山 明子
西城 鉄男
寺川 智美
鹿取 香代
取 材 細井 美保
デザイン 伊達デザイン室
写 真 辻村写真事務所
平田 尚加
印 刷 新江州(株)情報C
プ ロ グ 松崎 和弘
●ご協力
<滋賀県>
エコライフ課
教育委員会(生涯学習アカデミー)

環境部・水政策課(持続可能モデル)
商工労働部(経営品質)
琵琶湖環境科学研究センター
(持続可能社会モデル)
高島市
<大学>
滋賀県立大学
同志社大学
長浜バイオ大学
龍谷大学
立命館大学 d
<サポート>
編集 図書出版 文理閣
校正 企業の社会貢献研究所
講座 NPOキャリアサポートセンター
(財)淡海環境保全財団
麻生里山センター
支援 新江州(株)

〒526-0111
滋賀県長浜市川道759-3
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
★ブログ 滋賀・咲くブログ★
<http://shiga-saku.net>
<<http://shiga-saku.net/>>
キーワード=moh

[購読費振込先]

M・O・Hの会 代表 森 建司
●滋賀銀行 長浜支店 普通 136987
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)
●長浜信用金庫 本店 普通 0577468
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)
●びわこ銀行 長浜支店 普通 721691
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)

※記事中の写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。